

2020年2月10日

第2回
厚生労働省指定 臨床実習指導者講習会
(長崎県講習会)
報告書

2020年2月1日～2日
長崎医療技術専門学校
(長崎県長崎市)

一般社団法人 日本作業療法士協会

1. 講習会の名称：「厚生労働省指定臨床実習指導者講習会（都道府県講習会）」

2. 主催：一般社団法人全国リハビリテーション学校協会

一般社団法人日本作業療法士協会

公益社団法人日本理学療法士協会

3. 運営担当：一般社団法人長崎県作業療法士協会

4. 開催日：2020年2月1日（土）～ 2月2日（日）

5. 会場：長崎県長崎市 長崎医療技術専門学校

6. 主催責任者：

高木邦格（一般社団法人全国リハビリテーション学校協会 理事長）

中村春基（一般社団法人日本作業療法士協会 会長）

半田一登（公益社団法人日本理学療法士協会 会長）

7. 運営責任者：沖 英一（一般社団法人長崎県作業療法士協会 会長）

8. 講習会世話人名簿（別添1）

9. 講習会参加・修了者名簿（別添2）

10. 講習会の目標（学修目標）

目的：作業療法臨床実習において、効果的な臨床実習を円滑に行うために必要な知識を習得し、指導方法を身につける

講義・演習テーマ	学修目標
講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する
演習1 一般目標と行動目標	
講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	作業療法臨床実習における実習指導者の役割、学生の現代気質と実習中の心の機微およびその対応方法について理解する。
講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと 指導ポイント コーチング・ティーチング	作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学一模倣一実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した指導方法について理解する。
演習2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施 の実践	
講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、 ハラスメント、リスク管理、個人情報保護	作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する。また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。
演習3 ハラスメント防止	
講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割（OSCEの活用）	作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特にOSCE活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。
演習4 臨床実習における学生評価 重点ポイントの整理、実習遂行が困難な学生への対処法	
講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論・卒後教育との関連	作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもといた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。
演習5 多職種連携	
講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント（MTDLP）	MTDLPを活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLPの活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。
演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	
演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。
演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	見学一模倣一実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

11. 講習会のプログラム表

<1日目>

時間	講義内容	主担当
9:30~9:35	開会 オリエンテーション (講習会の進め方)	井戸
9:35~10:05 (30分)	講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	荒木
10:05~11:05 (60分)	演習1 一般目標と行動目標	荒木
11:05~12:05 (60分)	講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	福島
12:05~13:05 (60分)	講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと指導ポイント コーチング・ティーチング	中村
13:05~13:55	昼休み 50分	
13:55~15:25 (90分)	演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の 実践	牧野
15:25~15:55 (30分)	講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、ハラスメント、リスク管理、個人情報の保護	桑原
15:55~16:55 (60分)	演習3 ハラスメント防止	桑原
16:55~17:05 (10分)	休憩	
17:05~18:05 (60分)	講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割 (OSCEの活用)	丹羽
18:05~19:35 (90分)	演習4 臨床実習における学生評価の実際 重点ポイントの整理および実習遂行が困難な学生への対処法	丹羽

<2日目>

9:00~9:30 (30分)	講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論、卒後教育との関連	末武
9:30~10:30 (60分)	演習5 多職種連携	末武
10:30~11:30 (60分)	講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント (MTDLP)	村木
11:30~13:00 (90分)	演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	村木
13:00~14:30 (90分)	演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	丹羽
14:30~16:00 (90分)	演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	丹羽
16:00~16:05 (5分)	閉会・事務連絡	

*尚、演習は世話人全員がファシリテーターとなり実施致しました。

演習6-1は昼食を取りながら実施致しました。

12. 演習内容

(学修目標、発表の要点、グループワークで議論された内容、感想)

グループ数：13グループ

会場風景



- ① 演習1 一般目標と行動目標
- ② 演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実践
- ③ 演習3 ハラスメント防止
- ④ 演習4 臨床実習における学生評価の実際
- ⑤ 演習5 多職種連携
- ⑥ 演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践
- ⑦ 演習6-2 事例報告書の作成
- ⑧ 演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

演習 1

一般目標と行動目標

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ1 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：国光まどか

記録者：富田将

発表者：光武泰裕

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・対象者、スタッフとのコミュニケーション
- ・本人を見ていく（患者さんが望んでいる事、患者さんの思い、汲み取る能力、どういう人生を歩んできたのか、趣味、人となり、仕草・ジェスチャーなどの非言語）
- ・自分の役割の理解
- ・自分がどのように見えているのか
- ・患者さんに触ることに慣れていく
- ・トップダウンな考え方

感想

全体的にコミュニケーションを重きに置いている方が多い印象だった。分野は違ってもその方がどのような思いでいるのか、どのような方なのかを知ることが大事と再認識しました。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 2 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：坪田優一 記録者：本田史明 発表者：坪田優一

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. すべての関係者とコミュニケーション
2. 学びやすい環境作り
3. 作業療法への関心

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

コミュニケーション取ってもらう

OTとはどんな仕事か学んでほしい

疑問に思うこと、興味を持つこと

学生の特徴理解し、コミュニケーションを図りやすい環境を作る

色んな職種と話せるようになってほしい

学生がアクティブに動けるようになってほしい

家族を含めてコミュニケーションをとれるように

感想

実習内容や生徒の性格・医療分野での対応や異論が違い、意見も様々でした。主体的に動けるような生徒が少なくなっているといわれる先生方もいたので生徒の傾向がみえいい参考になりました。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 3 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者： 大久保早紀 記録者： 中村雄太 発表者： 松野有花

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 積極性
2. 社会人としての常識
3. 臨む姿勢

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・ 社会人としての在り方
- ・ 興味以外の分野ごとの楽しさ
- ・ 技術面より考え方価値観
- ・ 自分から学びに行くこと、疑問をもつこと

感想

分野に対する興味が持てない学生に対して、どのような関わりを持つべきか検討し、改めて考える機会となった。また同時に難しさも改めて感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 4 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者： 金澤 正樹 記録者：福井 翔一

発表者： 松尾 明晃

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. 他職種との関わり
3. 学生が行ったことに対する成功体験

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・OTの魅力を感じて欲しい
⇒コミュニケーションの取り方、情報収集
- ・評価に入る場合は学生と指導者という立場では無く、一緒に患者様に関わる一人として取り組む。
- ・老健⇒認知症の方との関わりが多い。リハビリを拒否される方も多い中でどのようにしてリハビリ室まで出ることが出来るのかの声かけ等を考えて欲しい。レクレーションを立案して、実際にやって頂く。⇒成功体験を楽しんで。
- ・臨機応変な対応を学んで欲しい。
- ・臨床で学校では学べない関わり方を学んで欲しい。
- ・教科書通りに評価できない場合の関わり方を学んで欲しい。

感想

・作業療法士として精神面、特にコミュニケーションを取ることについて考える方が多い印象。学生のみでなく、指導者も関わり方を学ぶ必要があると感じる。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 5 世話人氏名：桑原 由喜

GW 司会者：山口 勝史 記録者：吉岡 泰雅 発表者：本多 祐基

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 作業療法の臨床での実践
2. コミュニケーションなど社会性
3. リスク管理

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・知識と経験が少ないのでそこは求めず、まずは楽しい実習にしてほしい。
- ・患者さんに関わる前に情報収集したり多職種と話したりリスク管理の仕方。
- ・作業療法の実践の内容を理解してほしい。
- ・臨床に出る前、臨床での実践を体験してほしい。
- ・グループワークに対して患者さんにどう繋がるのかなど一つの活動がどう治療に繋がるのかを理解してほしい。
- ・社会性も身に付けてほしい。
- ・リハビリとしての治療だけではなく、患者さんとの距離感など信頼性がある治療になるので、患者さんとのコミュニケーションを多くしてほしい。

感想

知識と経験も大事ですが、患者さんとのコミュニケーションや挨拶など社会性を身に付けることも大事で、臨床に出る前に臨床の体験として経験を積んでほしい。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 6 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 黒木 一誠 記録者：時山 真梨 発表者：青野 香那

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の学年に関わらず、コミュニケーション能力を高めてほしい
2. 評価と考察をしっかり行い治療まで責任をもって担当してほしい
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・学生の学年にもよる（指導内容）、実習内容でも異なる
→1年生：社会性（挨拶などから）
- ・常時付き添って対応している。学生が一人にならないように。
- ・精神科ではコミュニケーションや関わり方を中心に学んでもらっている
- ・臨床の場では、学校で学習してきたことをどうリンクさせる
- ・長期の実習では、ある程度学んできていると思うが、学生は評価内容もまだまだ不十分なことが多い。
- ・学生には自分の担当として接してほしい。評価と考察し治療まで責任をもってできるようになってほしい。
- ・学生でも個性があり、ケースバイケースで対応していく必要がある
- ・わからないことは聞いてほしい。患者やスタッフと話す能力をつけてほしい

感想

学生にはセラピストや患者とのコミュニケーションに関わらず、日ごろから色んな人との交流をしてコミュニケーション能力を高めてほしいと思った。また、学生が相談しやすい臨床現場の環境作りや学生との関係性作りが大切ということを学んだ。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 7 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 山中文夫 記録者： 内野保則 発表者： 中野雅昭

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. OTの楽しさ
3. 社会性

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・病院の雰囲気を感じてほしい 慣れてほしい
- ・OTの楽しさがわかってほしい。
- ・コミュニケーションをとれるようになってほしい。柔軟に対応できるようになれば。
- ・多職種とのコミュニケーション。何を学びたいか考えてもらう。
- ・わからないことはわからないと言える。PDCA サイクルを回せるようになる。わからないときは助けてもらう。
- ・患者さんとのかかわり方を学んでほしい。
- ・社会性。提出期限を決めて、提出する。提出期限守れない。忘れた がある
- ・実習の目的・目標を設定し、その内容を学んでほしい。
- ・技術よりもコミュニケーション、社会性、雰囲気を感じてもらうことが重要。
- ・技術体験させたい。

感想

コミュニケーションの重要性を改めて再認識した。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 8 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：椋木健太郎 記録者：永田佑貴、山口健太 発表者：北村恵一

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. 多職種との連携
3. 治療の基礎

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・患者とのコミュニケーション
- ・スタッフ間とのコミュニケーション
- ・病棟との連携
- ・基本の評価方法
評価を行ったあとの問題点の出し方や目標を立てる過程、考え方
- ・カルテの読み方（薬など）

疾患の治療過程

（調べたことと実際がマッチングしにくい）

- ・リスク管理
- ・在宅スタッフ（ケアマネ etc）
- ・個人情報の取り扱い（SNS への投稿）
- ・報告、連絡、相談

感想

皆さんの日頃実習を受け入れるなかで学生指導の課題になっていることが班で共有することができた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 9 世話人氏名： 福島浩満

GW 司会者：松尾麻友

記録者：佐藤公紀

発表者：田中悟郎

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OT・社会人としての基本的な態度
2. 現場での沢山の経験
3. 知識と現象をつなげる場

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

患者とふれあい、OTの楽しさを学んで欲しい

患者との接し方、基本的な態度、目線・立ち位置、マナー、働きながら学ぶコツ

実際のOT現場でスタッフが見ているところを、その場で感じてもらう

患者を感じる力、人間性を学ぶ

訓練道具などにも沢山触れて、経験して学んで欲しい

どこまで学習し理解しているのか、基本的なシステムの理解？

⇒指導者が学生と会話しながら進めることが必要

知識と実際の現象をつなげることに現場で苦労する

感想

学生を持つうえでの困りごとも多く、相談できる場の必要性も感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 10 世話人氏名： 牧山美穂

GW 司会者： 遠藤信子 記録者： 小森祐介 発表者： 深堀敏之

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OTの思考過程
2. コミュニケーション
3. 実技

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・具体的に質問し、聞いてあげる。積極性を学んでほしい。
- ・学校で学んだことと臨床で学ぶことが違うため、教科書通りいかないことを学んでほしい。
- ・OTの思考過程は普遍的だと思うのでしっかりと学んでほしい。
- ・コミュニケーションを学んでほしい。対人関係。患者様だけでなく病棟スタッフも含めて。
- ・実技。まずはOTRがやってみせて学んでもらう。
- ・症例をどのくらい受け持つか。病院、事業所によって異なる。
- ・社会人としても動き。

感想

自分自身も工夫して実習指導に臨んでいく必要があると感じた。またディスカッションをしてみて考えることは同じということを感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 11 世話人氏名：早野 和之

GW 司会者：小中原 隆史

記録者：橋本 誠

発表者：山下 将毅

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション能力
2. 選択肢を広げる
3. 生活への汎化の工夫

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

症例に対して評価・治療・効果などの実感できる実習としてもらいたい
維持・機能低下していく患者様に対しても対処方法・リハビリのあり方を学んで欲しい
養成学校では学べない、吸引喀痰など様々な技術・経験を指導体験して欲しい
コミュニケーション能力、社会的スキルを身につけて自発的な意見を出出できる機会を
入院中にも生活場面への落とし込み方や環境調整などの理解を学んで欲しい

感想

- ・ 挙げた意見はどれも臨床の場であればこそ学習しうる内容で、改めて臨床実習で学生に指導することの意義を感じた。
- ・ 自身の意見に対して参加者の視点からのフィードバックを得ることができ、自身の意見について見解を深めたり、新たな気づきを得る機会ともなった。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 12 世話人氏名：中村義博

GW 司会者：武田芳子 記録者：馬津川龍太 発表者：田中翔大

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OT の仕事を好きになってほしい
2. OT の仕事の多様性を知ってほしい
3. OT の臨床思考過程を学び、学内教育とマッチングしてもらおう

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・症状と患者とのマッチング。評価の仕方。学校と現場での違いを学んでほしい。
- ・訪問では実習が終わった状態である。在宅について、学ぶ、地域で関わる OT の役割を学んで欲しい。見てもらえればなど。
- ・人それぞれで個人的な因子でアプローチの仕方など違って来る。同じ疾患でも症状の出方が違う事など学んでもらいたい。
- ・精神科では、学生が抱えている精神科のイメージを 治療アプローチ、作業療法士が他の職種とどのように関わっているのか学んでもらいたい。
- ・他職種との関わり、カンファレンスなど見てもらいたい。
- ・施設に OT が多いので、一人一人の考え方なども学んでもらっている。
- ・OT がどのように関わっているのか、こういう分野があるよ 強要ではなく説明する
- ・病院以外にも訪問の施設もあるので、院内・院外の繋がりなど学ぶ
- ・OT の仕事を好きになってほしい。やらされているわけではなく。

感想

OT の仕事を好きになってほしいという気持ちに班員で共感した。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 13 世話人氏名：内田智子

GW 司会者：高木 魁 記録者：生田 恵 発表者：壺岐尾俊太

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 社会性
2. チームとしての動き
3. 作業療法を楽しむ

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・社会性・コミュニケーション（職員や患者様の挨拶など）
- ・入院から退院までの流れやそれに伴うチームアプローチの大切さを学んでほしい
- ・模倣はできるが、自分で考えること
- ・患者の疾患などは分かっているが患者様自身に対して目が向かない、チームとしての動き
- ・コミュニケーション（質問責め）関わり方を学んでほしい
- ・作業療法を見て楽しんでもらいたい
- ・OTを楽しんでもらいたい
- ・予後の理解をして頂きたい
- ・考え方のきっかけだけでも分かってほしい
- ・成功体験を積んでほしい
- ・スタッフから知識を収集してほしい

感想

- ・指導者側と今の指導者の実習に対するギャップが大きい
- ・前向きな意見も多く見られた

演習 2

基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 1 世話人氏名： 村木敏子

GW 司会者：大石恭子 記録者：富田将 発表者：光武泰裕

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 理解度
2. 熟練度
- 3.

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・学生が理解しやすく、どれくらい理解出来ているのかが把握しやすい（どこがわかっているのか、どこがわかっていないのか）
- ・見学、模倣、実施と繰り返す中で学生の熟練度が向上しやすい
- ・患者も繰り返し教えてもらう事で理解度が深まる
- ・言語としての表出する能力が養える
- ・リスク面の把握や理解が深まるので学生も不安が軽減しやすい
- ・学生と SV との信頼関係が構築されやすい

課題

- ・どの時点になったら「実施」へ移行して良いのか判断が難しい
- ・精神科、小児分野では活用しにくい
- ・患者の治療と評価との境界が難しい
- ・指導者の技量が試される

感想

・作業療法参加型実習に移行することで学生、患者、SV にメリットがあるが、「見学、模倣、実施」の移行基準や精神科、小児分野での応用など SV の技量が試される面もあった。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 2 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者： 榎山力 記録者： 國分亮吾 発表者： 榎山力

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 手順の明確化
2. 応用性への課題
3. 対象者の選択

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

その場でフィードバックできわかりやすい。その場でニーズの確認ができる。先にリスクの確認ができることで安心できる。見るポイントを絞れる。学生は手順が分かりやすい。その場で学生の理解度が分かる。学生も安心感がある。対象・目的・手段について学生が理解しやすい。

課題

学生の自発性引出しにくい。就職したとき困る可能性がある。患者様が限局される。協力してくれる方。1個1個説明していたら時間がかかる。

感想

「作業療法参加型実習」のメリット、デメリットを理解して指導者も指導する事が大切だと感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 3 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者： 中村雄太 記録者： 松野有花 発表者： 竹本知高

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. わかりやすさ
2. 時間がかかる
3. 指導者の課題

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・事前の説明があることで流れがわかりやすい
- ・丁寧な指導（わかりやすい）
- ・リスク管理 手段などの内容が入りやすい
- ・学生側として復習がしやすい

課題

- ・精神科、小児分野では難しい
- ・時間を取ることが難しい
- ・全員の患者様はできるか
- ・その場での説明をどのようにしたらいいか
- ・患者様の協力度合の違い(拒否・暴力など)
- ・学生に失敗をさせないことが重要

感想

学生にとってはとてもわかりやすい方法ではあるが、指導者側としては時間がかかる等、課題も多い。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 4 世話人氏名：桑原由喜

GW 司会者：野副康明

記録者：金澤正樹

発表者：福井翔一

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 丁寧な指導ができる
2. 患者様・学生の負担が軽減できる
3. 指導者の負担が増える

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

丁寧に指導できる

学生指導後に実施のため、患者様の不安が少ない

学生が介入するにあたり、学生の不安が減る

フィードバックの機会が増える

課題

学生の意見を聞く前に説明をするので学生の能力がわからない。

学生の考える機会が減っている

受身の学生が増える

ティーチングとコーチングの使い分けが難しい

指導に時間がかかる

スタッフ間で学生の指導がどこまで（模倣まで終わっているか）行えているかわからない

感想

メリット・デメリットがあり、実施するにあたり、指導者が十分に理解して指導を行う必要性を感じた。

報告書：演習2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 5 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 峰脇 優 記録者： 中村 ひかる 発表者： 吉岡 泰雅

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 効率的
2. 成功体験
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・SVが反復して正しい方法を指導、確認することで学生の記憶に残りやすい。
- ・その場で指導修正ができるので時間も効率的。
- ・反復できることで、身につけやすい（患者、学生ともに）。
- ・改善点をすぐ指摘、修正出来る。
- ・学生の成功体験として残りやすい。

課題

- ・患者様が何度も練習するため患者様にストレスを与えることになる。
- ・学生から患者様にフィードバックされて、嫌に感じる患者様も居るのでは。
- ・自分で考える能力が身に付きにくい。
- ・指導者の教え方が反映される。

感想

見学・模倣・実施についてSVを介して行うことで患者様、学生共に安心感が生まれるのではないかと。しかし、患者様の負担も増えるため、患者様の要望等聞きながら時間の配分も考慮する必要がある。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 6 世話人氏名：大坪健

GW 司会者：東村美香

記録者：青野香那

発表者：黒木一誠

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生、患者さん、バイザーともに安心感がある
2. 患者さんへの負担
- 3.

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

学生：いきなりするよりも、事前にポイントをチェックしながらできる／安心感がある／わかりやすい

患者さん：しっかり診てくれる／学生からいきなりよりはセラピストが先にするほうが安心できる

バイザー：患者さんへのリスクの軽減／学生ができていないところとできないところが把握できる

学生の理解度や能力の評価が可能

課題

学生：バイザーに依存的／応用が難しい／指導したことができない

患者さん：患者さんにとって何度もするので、回数が増えることが負担

ADLの訓練はリハビリになるが、機能評価は何度もすると患者さんに負担／期間の設定が必要

患者さんのリハビリの進行への不安

評価は何度もすると患者さんが学習してきちんとした評価ができない

バイザー：精神分野、小児分野では模倣することが難しい

感想

学生、患者さん、バイザーへのメリットもあるが、まだまだ、課題点があるので、その課題点をクリアしていきながら、作業療法参加型実習へ取り組んでいく必要があると感じられた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 7 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW 司会者：中野 雅昭 記録者：中嶋 康貴 発表者：内野 保則

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 不安軽減
2. OT のスキルアップ
3. 患者自身もわかりやすい

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・その場で何をしているかわかりやすい（目的・リスク管理）。
- ・手順を把握できる為不安がなくなる。
- ・患者自身も説明があるとわかりやすい(ラポール形成)。
- ・見学・模倣・実施という流れで足並みを揃えることで OT のスキルアップにつながる。
- ・コーチングやティーチングを使うことで説明しやすい。

課題

- ・模倣時の学生に対する声掛けの仕方。
- ・学生に対してどこまで説明・指導するのかがわかりにくい。
- ・時間管理。
- ・患者の選定が大変。

感想

- ・メリットだけでなく課題も把握できた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 8 世話人氏名：福島浩満

GW 司会者：平田修己 記録者：北村恵一 発表者：山口健太

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 時間
2. 安心感
3. 理解度

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・何を勉強したら良いかわかりやすい。安心できる。（患者も安心できる）
- ・その場でフィードバックすることで学生の理解度を明確化できる。
- ・リスク管理が容易
- ・医療チームの一員としての自覚を促せる（責任感の自覚）
- ・なにを達成したかわかりやすく、自身につながる
- ・指導者が常に側にいるため患者も安心感を得られる。

課題

- ・フィードバックに時間がかかる。
- ・同患者に毎度介入できるとは限らない。
- ・見学→模倣→実施の移行期間が明確でない。→学生、患者の失敗体験につながる。
- ・精神科 OT では限定的になってしまう場合がある。

感想

実際の臨床実習指導経験からのメリット、課題を提起することができた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 9 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：寺中香奈子 記録者：松尾麻友 発表者：宮地詩織

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生のメリットとして指導者の思考過程を知ることができる
2. 学生指導の時間の確保をどうするか（時間がかかる）
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・学生のわからないことが分かる
- ・指導者は患者様の病態の復習になる
- ・指導者の思考過程を知ることができる
- ・考え方が繋がりやすくなる（プログラム、評価）
- ・模倣を入れることでわかりやすくなる
- ・時間の無駄がなくなる（事前に伝えるため）

課題

- ・時間がかかる
- ・精神科だとその場でフィードバックができない
- ・病院内での業務＋学生指導の時間の確保（病院でどうするかを検討）
- ・学生によっても汎化できる学生とできない学生がいる

感想

学生や患者にとってメリットが大きいのが、病院の受け入れ態勢を検討する必要があると感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 10 世話人氏名： 早野和之

GW 司会者： 笹原佳美 記録者： 峯 信一郎 発表者： 小森祐介

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生、患者様両者に理解してもらえる
2. 時間配分
3. 精神分野での導入法

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

細かく指導があるため安心して練習ができる。

学生にとって安心、不安解消。

患者さんも説明を聞くことで理解、安心できる。

課題

指導者は大変

時間配分どうしていけばよいか。（時間がかかりそう）

患者の理解を得ることが難しい。

精神分野における治療場面に当てはめるのが難しい。

動作中に声掛けが難しい。

感想

特に教えたポイント以外の場面すべてで同じように指導するのは時間的に負担が大きいと感じる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 11 世話人氏名：中村義博

GW 司会者：松尾理恵

記録者：鶴添大輔

発表者：小中原隆史

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生-患者双方にリスクの軽減が可能
2. 焦点が明確な指導
3. 集団リハでは課題ありか！？

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・リスク管理の指導が事前にしっかり行われる点が、患者にとってメリットではないか。
- ・評価にあたっての事前知識・準備など、学生が学ぶ機会となる。
- ・限局した症例選定～説明が省略される。
- ・時間をかけて丁寧な説明が可能で学生にとってもわかりやすく、またそうすることで患者にとっても安全が図られる。
- ・学生にとって“何に取り組むのか”“何を学習するのか”が焦点化されやすい。
- ・学生のスキルの習熟度合い等が、指導場面を通してすぐに指導者へフィードバックされる。
- ・学生への説明を患者も聞くことで、患者が自身の病状・リハについての理解が深まる。
- ・学生のスキルが上達すると、患者にとってのリハの機会も増える。

課題

- ・学生の練習の機会が通常のリハに上乘せられることで、患者の負担が増大する。
- ・指導者が変わった場合、学生の習熟度合いをしっかりと共有する必要がある。
- ・精神リハ（集団活動）では、動画のような模倣レベルの指導は困難である。

感想

モデル動画を視聴できたことで、より具体的なイメージが出来た。スタッフ、学生のメリットは直ぐに気づくことが出来たが、患者へのメリットは個人レベルでは気づきにくかったが、グループワーク内で質問、意見がシェアできたのは貴重な時間となった。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 1 2 世話人氏名： 内田智子

GW 司会者：山下剛

記録者：落合美穂

発表者：谷本晃一

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. お互いの理解が深まる
2. 時間が足りるか
3. 事前準備が必要

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・ 3回実施する事で患者さんと学生の関係性やコミュニケーションが取れやすい。
- ・ ポイントが分かりやすい、理解しやすい。
- ・ 学生と患者さんに丁寧に説明している。

課題

- ・ 時間がかかる、負担がかかる
- ・ 1人の患者さんに定着する（たくさんの人を見てほしい）
- ・ 現場だけでなく訓練前に説明する事も大切
- ・ 学生が理解できているところは省略していい
- ・ 学生を理解してくれる患者さんの選定。
- ・ 患者さんへのメリットは？（指導者へのメリットも）

感想

学生へのメリットは大きいですが、患者へのメリットや指導者の事前準備などの必要性の確認は必要だと考えられた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 13 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：平松直也 記録者：渡邊正之 発表者：壺岐尾優太

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 治療と指導の葛藤
2. 見学と模倣の判断
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

(エクセルシートをコピーアンドペスト)

- ・段階を踏んでいるので、学生にとってわかりやすい
- ・その場で理解度の確認が出来る
- ・指導者の時間の短縮
- ・学生の健康状態は守られる（凹まない、のびのびしている）

課題

(エクセルシートをコピーアンドペスト)

- ・指導者にとっては丁寧に教えられる為大変
- ・見学から模倣へ行く段階で理解できないと進まない
- ・ステップアップの判断がしづらい
- ・変化が速い患者様に対して見学→模倣へ進める上で追いつかない
- ・手技の変化へ学生がついていけない
- ・見学から模倣に移行できない時、見学実習で終わってしまう
- ・治療より、指導を占める割合が多くなっている

感想

- ・身体分野に関しては「時間」「治療と指導の割合」に関して話が多く出ていた
- ・精神分野では、その場でのフィードバックが難しいことが挙げられた

演習 3

ハラスメント防止

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 1 世話人氏名：中村和也

GW 司会者：森崎みなみ 記録者：富田将 発表者：川嶋沙央里

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 業務の一環
2. 同姓
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・業務外での過度な関りをしない（ご飯に誘う、飲み会に誘う、帰りを送る）
- ・遅くまで指導しない
- ・マンツーマンや個室ではなく2人での体制やスタッフルームでのフィードバックをする
- ・事前説明を十分に行う
- ・学生とSVは同姓にする（BLGTの方であれば適切な方に担当してもらう）
- ・不必要な雑務を強要しない
- ・業務の一環であるかどうかを学生にさせてもいいかどうかの基準にしてはどうか
- ・相談窓口を作る

感想

以前と比べてハラスメントに関して考える機会が増えてきているので対策も出来る反面、ハラスメントを過剰に考えすぎて行動しにくいこともあると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 2 世話人氏名：牧野航

GW 司会者：岩永雅美

記録者：吉田将人

発表者：岩永雅美

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 第三者の介入
2. 個人因子
3. 職員の意識・知識の向上

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・他職種からの飲み会への誘い対しての対策
最初から、飲み会への誘いを行わないよう他職種に伝える。(統一事項として)
- ・彼氏がいるの(個人情報への質問)
個人因子に踏み込まない
- ・歓送迎会への対策
歓送迎会をしない
- ・個室でのフィードバックを行わない、学生の注意をみんなの前でしない。
- ・学生がスタッフの容姿について口に出したことに対しての対策
容姿的なことは口に出さないように注意する
- ・異性間の実技指導になると受け取り側の受け取り方によっては問題になることに対策。
同性者で指導は行うか第三者の介入を依頼する。
- ・明らかにオーバーワークとなるような行事への参加・職場のお茶くみ・掃除を強要される
強要しない、決められた規範内で説明し実施してもらう分はいいのか。
- ・ハラスメントや指導に関して内部研修を行う

感想

以前から行っていたことでも、現在はハラスメントになる危険性も高いため、言動や行動は注意する必要があると思いました。バイザーも学生も負担なく実習を過ごせるよう、気をつけながら今後の実習には臨みたいと思います。指導を行う上でも、第三者（統括者など）の介入は大切だと思いました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 3 世話人氏名：桑原由喜

GW 司会者：松野有花

記録者：竹本知高

発表者：西村和也

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生にハラスメントの説明と選択権を与える伝え方をする
2. 社会の理不尽さを伝える
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

*時間外での勉強会について

時間外であれば声かけない。時間内のみ声をかける。

ハラスメントについて説明後、案内をする。相手に確認する。

事前に学生に伝える。

社会の理不尽さを伝える。（幅広く理解する旨を伝える）

感想

どう伝えても相手のとらえ方次第なので、難しさを感じた。ハラスメントを相手に確認する必要があると思った。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 4 世話人氏名： 丹羽 淳

GW 司会者： 松尾 明晃 記録者： 合原 尚子 発表者： 松本 順子

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 個人情報
2. フィードバック
3. 同性

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・連絡がある場合は学校の実習担当の先生が連絡してくれるようになっている。（個人間のやり取りができないように）
- ・飲み会はしない。
- ・不用意に下品な話はしない環境を作る。
- ・異性のスタッフが指導しにくい内容は同性が指導するように配慮する。
- ・出来れば同性の指導者をつける。
- ・フィードバックの時に他のスタッフが介入できる環境で行う。
- ・興味関心チェックリストをとって学生がしてもいい関心がある話を聞いてみるのも良いかも
- ・直接聞くと問題になることもあるので患者さんとのやり取りの内容で判断する。

感想

改めて指導者個人の言動や指導に注意するとともに指導者以外のスタッフや学校の介入を求めながら連携して実習を行っていく重要性を感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 5 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：黒田結花

記録者：緒方 剛

発表者：中村ひかる

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. SV のリスク管理
2. 学生・学校・他スタッフとの情報の共有
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

<対応策>

指導者側の言葉遣い→指導者側の意識の徹底。

勤務時間外の業務→職場への上申。システムづくり。

フィードバックの時間が長い→業務の一環と考え、CCS を用い時間内で終わらせる。

歓送迎会について→歓送迎会の自粛。

連絡先→緊急時の場合にのみ使用すること、本人の同意のもと聞く。

研修会等を利用し、情報・知識の共有を図る。

感想

様々なエピソードを共有でき、その対応も学習できた。時代の流れとともにハラスメントの内容も変わることもあるので、情報の共有・指導者側の意識の徹底を行っていきたい。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 6 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：宮崎優美子

記録者：黒木一誠

発表者：東村美香

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 統括者（第3者）との面接
2. 学校とのルール決め
3. 発言しやすい環境作り

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・ハラスメントに対して、バイザーと学生と第3者の立場から面接を実施する。
- ・バイザーにもハラスメントに関する教育を行う。病院自体のハラスメント機能強化。
- ・車での送迎が必要な場面では、同性の方に依頼する。
- ・学生のパーソナリティを踏まえて学校側と個人情報に関するルール決めておく。
- ・患者からのハラスメントに関して、バイザーや他のセラピストに言える関係性を作る。
バイザー以外の目を作る。

感想

こちらが気付いていない間にハラスメントになっている場合もあるので、学校との話し合いなどをしながら、様々な視点で注意していく必要があると感じました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 7 世話人氏名： 福島 浩満

GW 司会者：松平 夏美 記録者：古荘 広樹 発表者：平田 彩夏

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 飲み会
2. 女性の学生への対応
3. フィードバックする環境

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

飲み会に行かない。

異性の学生に指導する時、閉鎖されたところに行かない。

私たちが正しい知識を身に付ける。

女性の学生の際は女性に出来ればよい。

年上の学生にはどう伝えようか迷う。

院内での研修会を実施する。

ハラスメントのDVD鑑賞。

良好な関係作り。

距離間を大切に。

学校側からの指導(化粧等)。

携帯番号を聞かない

感想

加害者とならないように勉強会がある場合、積極的に参加しなければならないと感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 8 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：北村恵一 記録者：中角志保美・平田修己 発表者：椋木健太郎

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 実習施設と養成校の連携
2. 実習施設としての在り方
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・学生の性格などを養成校から情報提供してもらおうとよい（連携をとる）
- ・業務開始前にその日の予定を SV と確認・共有する
- ・他の部署にも学生が実習中であることを伝える
- ・施設全体で学生をみていく

感想

ささいなこともハラスメントになるので気をつけないといけないと思いました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 9 世話人氏名： 早野和之

GW 司会者： 田中悟郎 記録者： 高木孝一 発表者： 高下将輝

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 業務時間内
2. 養成校との連携
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・実習後の送別会参加の有無を学生に決めてもらい強要しない。
- ・業務時間内(昼食)で交流している。
- ・業務時間内でのフィードバックにしている。
- ・SVが予めデイリーノートやレポート等に目を通して開いた時間でフィードバックする
- ・実習時間内で学生にデイリーノートやレポート記載の時間をつくる。
- ・問題があった際は学校へ病院側から報告して学校側に対応してもらう。

感想

当事者同士だけでなくグループで学生をフォローしたり、学校側とスムーズに連携を取っていく事が重要だと感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 10 世話人氏名： 中村義博先生

GW 司会者： 小森祐介 記録者： 遠藤信子 発表者： 深堀敏之

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 早めに情報収集や状況の把握を行って、未然に防いでいく。
2. 第三者に入ってもらうなど、複数の対応をするとトラブル防止になる。
3. こちらの意向などを丁寧に伝えるなど、フォローする。

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・指導した内容について、統括の指導者が、理由などを補って再度説明していく。
- ・統括の指導者が、学生と担当指導者の間に入って、積極的にこちらから困ったことを聞いて、学生さんのメンタル面の状況を把握していくことで予防策になる。
- ・学生が言えなくて、ストレスが積もり積もってしまう前に、早めに学校側とも連携をとれるようにする。
- ・異性の場合、場所や言動などの配慮が必要。1対1よりは、複数で対応したり、間に第三者が入ることで防止できるのでは。

感想

とっさの言葉でもハラスメントになると感じた。受け手の取り方次第なので十分気を付けないといけないと感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 11 世話人氏名：内田智子

GW 司会者：三宅陽平 記録者：山下将毅 発表者：橋本誠

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 環境調整
2. 情報共有
3. 信頼関係

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・指導内容によっては直接指導せず学校に相談
- ・コンタクトの必要な指導などは同性のスタッフに依頼する
- ・フィードバックを行う時間・場所などを配慮する
- ・実習統括者が中間面接を実施、実習の状況などを確認する
- ・学生がハラスメントに関して相談しやすい環境を整える（複数設置するなど）
- ・どういったことがハラスメントにあたるのか等研修会を実施
- ・学生は声を上げにくいということを考慮する

感想

- ・良かれと思っていたことや、些細なことでも受け取り方でハラスメントになってしまう、明日は我が身と肝にめいじようと思った。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 12 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：山井亨

記録者：田中翔大

発表者：馬津川龍太

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. ハラスメント
2. 学生の意見を尊重
3. 距離感

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・飲み会自体の禁止。又はルール化を設定。（強要しないよう。学生の意見を尊重）
- ・指導外では一対一にならない。
- ・訪問なども明るい内に連れていく。夜は同席させない。
- ・指導は原則同性スタッフが行う。
- ・実習指導に対する相談窓口を用意する（病院内に）
- ・掃除に関しては必要性を説明し一緒に行う。

感想

実体験を基にしたハラスメント体験が多く、ルール化や職場内での認識の共有化が必要と感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 13 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：生田 恵 記録者：渡邊正之、高木 魁 発表者：川原 梓

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 第3者の目
2. オープンな場
3. 指導の短縮

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・実習後の飲み会では、自主参加性・食事会・ノンアルコールにする。
- ・オープンな場でのフィードバック
- ・二人きりにならないように心掛け、第3者が客観的に評価できるような環境にする
- ・指導時間を決め、スケジュールに組み込み時間短縮した
- ・指導者が男性の場合は女性学生に指導の配慮する

感想

- ・異性の指導者・学生での立場の変化によりハラスメントのとらえ方が違う
- ・タッチングに対する考え方の違いがあり、それぞれの所属で一度話し合い検討しておく必要がある

演習 4

臨床実習における学生評価

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 1 世話人氏名：牧野航

GW 司会者：宮崎豊 記録者：富田将 発表者：川端佳菜

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 基本的な態度
2. 自発的な姿勢
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・笑顔が上手に出来るか ・社会適応能力 ・基本的態度（挨拶） ・対人対話能力
- ・ほうれんそうが出来るか ・場の流れを把握する能力 ・症例との関係を上手くとれるか
- ・自主性 ・フィードバックされた事を意識して動いているか
- ・同じ失敗を繰り返さないように努力出来ているのか ・素直さ ・自己評価が出来るか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・基本的な評価技術（ROM、MMT などの基本軸などが載っている評価用紙）
- ・基本的な態度 ・自発的な姿勢 ・一般的な評価の名前（小児）
- ・事前情報からの事前準備（どういう疾患が多いのか等から） ・語彙力、文章力？
- ・読解力（SV が訂正した文章を理解できる力）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・順調に見えていた学生が実習地に来なくなった→養成校に連絡
- ・SV が言うことを理解できない→評価する内容を事前に伝えてその評価をしてもらう
- ・腹痛により実習地に来られない→養成校に連絡
- ・学生が難病の方に予後を伝えた→今後の実習生に注意喚起を行った

感想

・挨拶や笑顔、社会適応能力などの基本的な姿勢が求められていることが多く、その上で自主性、素直さ、最低限の評価技術が求められている事を再認識した。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 2 世話人氏名： 井戸佳子

GW 司会者：山崎和子 記録者： 濱根九十九 発表者：山崎和子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 基本的態度
2. 養成校との連携
3. 基礎知識

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・基本的態度：受け身の学生の自主性、積極性の伸び、意欲（質問をする、職員への関わりなど）
- ・基本的態度：社会人としての身だしなみ、マナーが守れるようになる
- ・必要な評価を正しく実施できるか
- ・積極的に評価をし動くがまとまらない所から考えまとめられるようになった（変化を感じた）
- ・確認して立てた学生の目標が達成できたかどうか（学生の目標を共有する）
- ・到達目標：計画立案までいかなくとも次の実習につながる思考過程が芽生えてきたか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面：・基本的な態度（挨拶、身だしなみ、健康管理、時間厳守）

知識面：何のために評価をするか、何の目的なのか。・最低限の知識はわかっているほしい。・評価の網羅。（ROM の上肢はしたけど、下肢はしてない・・・など）・ 実習場所の疾患についての知識

技術面：・ある程度の評価の測定の仕方（全部を教えている時間はない。）・ 自分がしていた遊びなどを思い出すこと（発達分野）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・患者に拒否された（評価ばかり行い患者への気遣いがなかった、学生の言動が悪かった）
- ・学生に状況を確認して、学生と問題点を共有し解決策を出す
- ・学生が臨床実習の環境に慣れず、体調不良となり実習中止にせざるを得なかった
- ・学生の状況を学校側へ連絡し、実習中止と対応した

感想

第三者の評価や学校との連携の重要性を再認識できた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 3 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 竹本知高 記録者： 西村和也 発表者： 丸田美佳

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 伸びしろ
2. 積極性
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

(エクセルシートをコピーアンドペースト)

- ・成長してほしいところ、変化の見られたところ（伸びしろ）
- ・最低ラインだけはきちんと採点したい
- ・知識面だけでない当たり前のこと（職員や患者様に対する態度について）
- ・担当以外の患者様に対する興味・考え方
- ・学生の積極性・行動面（学生自身が積極的に行動できているか?）
- ・バイザーの声かけ促し頻度の減少（伸びしろ、積極性）

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・実習地の周辺情報を事前に調べる ・実習地の情報を調べる（老健の仕組み等） ・身だしなみ（髪色、服装）
- ・評価（基本的な知識）、評価用紙の準備 ・病態、症状の把握・整理 ・正常発達の流れ（小児分野）
- ・実習に対する心構え（術後や閉鎖病棟等に対する） ・実習に対する自身の明確な目標

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・部活を継続的に取り組んでいる学生で、前もって伝えられたが・・・両立できるように言っていたが、実習に集中できなかった。→学校のほうに伝えた。
- ・片道2時間半かけて実習にくる学生がいた。実は ADHD だった。学校と相談して実習時間を短くして対応したが、実習は終了した。
- ・遅刻してくる学生、学校には連絡したので実習先には連絡しなかった。指導したが泣いてしまった。その後は実習継続出来た。
- ・課題が多く、親から連絡がきた学生は課題を半分に減らし対応した。わからないことを聴取して対応した。学校には伝えた。

感想

学生の知識面よりも積極性や成長過程等に対して重要視する点が多く意見が挙がった。そのような評価は点数化できない部分もあり、今後学生評価において統一化する必要性がある点であると考えた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 4 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：合原尚子

記録者：福井翔一

発表者：池田千鶴

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 努力の姿勢
2. 人として
3. 客観的な意見

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・患者さんとコミュニケーションが取れるか、取ろうとしているか。
- ・中間評価等で改善が見られているかどうか（のびしろ）。
- ・改善しようと努力しているか。姿勢。過程。
- ・基本的な意欲。
- ・基本的に実習受け入れる側としては、落とそうと思っていない。
- ・前の実習地での成績や情報があると生かしやすい。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・学校で学べる事（基本的な用語の理解、評価方法など教科書レベルのこと）は押さえて来て欲しい。
- ・最低限の身だしなみはしっかり（腰パン等だらしない格好は避ける）
- ・挨拶などの基本的態度、適度な緊張感、謙虚な態度
- ・患者さんに協力してもらっているといった実習させてもらっている意識は持ってほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・ケースバイザーと合わなかった→実習地訪問で先生に来ていただいた時に相談したが、結果バイザーが変わった。
- ・レポート提出が目標だったが、達成できそうになかったため、最終目標を下げた。学生が行うことできる目標を考えてもらってきた。
- ・学生を病室に置いていた時に、戻ってきたら患者さんを移乗させていた→学生を一人では行動させない。そばにスタッフが付いておく。
- ・出来ないことが多くても、まず成功体験を得て、自身を付ける。

感想

- ・様々な意見が出たので考えさせられました。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 5 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者：本多祐基 記録者：桑原太志 発表者： 緒方剛

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の自主性・意欲
2. 指導者の振り返り
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・修正能力（自己評価できているかどうか、失敗等を認められるかどうか）
- ・スタッフ・対象者との関係性（距離感、信頼関係）・作業療法を学びに来たかどうか
- ・適応力、積極性、自主性、意欲面（SV がいないときのなど含め積極性）
- ・初めに立てた実習の目標に向けて変化があったかどうか・一緒に仕事がしたいかどうか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・基礎疾患等の基礎知識・基本的な評価方法（ROM の基本的知識など）
- ・この実習で自分がどうなりたいかを考えてきてもらいたい（何を学びたいか）
- ・気になる疾患などを事前に考えてもらいたい（具体的に見たいこと）
- ・作業療法士の実習にきていることをわかってきてもらいたい・健康な体・基本的な態度（挨拶など）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・レポートが提出できない（プリンターが壊れた事を理由に 6 回）⇒学校へ報告
- ・身障の実習に来たが違う分野に進みたい⇒色々経験させたが厳しく学校へ対応を依頼
- ・精神科の特有の空気に慣れず、本人から来れなくなった⇒自身で心身の状態把握ができていなかった。指導者側の対応の振り返りを行った。
- ・前の実習生のレポートをコピーして提出。→学生と話をして解決

感想

実習での問題の事例とその対応などや色々な指導者の考えなどを共有でき、今後の指導に役立てると思いました。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 6 世話人氏名：福島浩満

GW 司会者：立石尚

記録者：東村美香

発表者：宮崎優美子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 評価時には社会人としての基本的な能力、やる気、満足度に重きを置いている。
2. 備えてほしい内容は、OT としての基礎知識、意欲、健康面。
3. 学生には精神面の不安定さからくる問題が多い。対応として学校のサポートが必要。

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・主体性、社会性、コミュニケーション能力、リスク管理、やる気
- ・どういう視点、考え方で実習に臨んでいるか。
- ・実習前に立てた評価を聞き、達成度を終了時に聞く。デイリーノート。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・疾患の基礎知識、評価項目、それに伴う資料。小児では子供と遊べる能力を持っておく。
- ・基本的態度、言葉遣い、やる気。健康面、体調面の管理。
- ・介護保険知識、社会資源、作業療法のイメージをまとめる。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・フィードバックした内容が次の日に反映されない。
- ・遅刻、実習に来なくなる。黙り込む。泣く。仮病。レポートを出さない。意欲がない。
- ・学生自身に内科疾患あり、バイザーについて見学もできない。

対応：学校へ連絡。実習生と話をする。バイザーを変更。レポートができずとも責めることはせず、時間をかけてバイザーとともにレポートを病院で作ってもらった。

感想

バイザー側が学生のどこを見ているかを各施設間で意見交換ができ、よかった。また、問題のある学生に関しては学校の協力を得ることができるのはバイザーとして安心感がある。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 7 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：平田彩夏 記録者：中野雅昭 発表者：古荘広樹

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 健康管理
2. 社会性
3. 生活力

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・長期実習の際には伸び率（改善点）、頑張っている姿勢
- ・（担当患者様でレポート書いてもらう）患者様とのラポール形成が大切
- ・中間評価（自己評価）からの変化が見られたとき頑張りが見える
- ・患者様との関わり方
- ・最初の時の関わりから実習の最後の方にどのような変化しているのか、積極性や疑問の持ち方、実習に対する姿勢
- ・会話やレポートの中から学びが多く聞かれたか、社会人になったときに対応できるか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

【態度面】

- # 社会性（挨拶／身だしなみ 等） # 健康管理（元気な状態で） # 実習に取り組むにあたって目標・目的意識
- # 忘れものしないで # 生活力（慣れない環境で生き抜く力）

【知識面】

- # 疾患特性

【技術面】

- # 評価方法・手順

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・症例から怒られてトイレにこもる⇒女性スタッフが声をかけて、次の日から普通に対応できた。認知症の対象者
- ・せん妄の対応でできずに泣いた⇒対応がわからないときは相談するように指導した
- ・指導の時間が30分遅くなった。学生へ事前に連絡していた。親から帰ってきてないと病院へ連絡あった。⇒学校へ連絡した。過保護の保護者であった。
- ・化粧が濃い⇒女性スタッフが指導した。その後学校が対応した。
- ・生活態度が悪い。宿泊施設の片付けができない。借りた車の事故を隠ぺいした。⇒実習は最後まで行ったが、再実習。

感想

学生評価はどの施設も知識、技術面より実習への取り組み方、患者様との関わり方、実習中の変化に重きを置いていた。基本的態度の重要性を感じた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 8 世話人氏名：早野 和之

GW 司会者：山口 健太 記録者：永田 佑貴 発表者：平田 修己

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 医療人・社会人としての基本的態度（報告・連絡・相談）、リスク管理、交流
2. 元気とやる気（体調管理）、医療人としての心構え、目標
3. 自己判断

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・社会人、医療人としての基本的実習態度・リスク管理（転倒、点滴等のルート関係、環境設定、物品の取り扱い）
- ・報告、連絡、相談（自己判断になっていないか）・患者様への関わり方（コミュニケーション、接遇）
- ・OT としての考え方が理解できるようになっているか・学校の方針に則って技術的な解釈ができるようになったか
- ・実習の前後での変化、成長点

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・実習自体への興味・実習に対する目的意識（目標）・あいさつなど社会人としての心構え・疾患、実習先の勉強

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

事例

対応

- ・昼休みの時間にレストランに昼食へ行っていた → バイザーと学校が連携し、指導する
- ・自己判断で患者様を病棟へ戻っていた → リスク等を説明し、指導する
- ・体調不良のため自己判断で休憩していた → 指導者や統括、学校と話し合う
- ・体調を崩しやすい学生（自殺をほのめかす） → 学校との連携、情報交換を行った

感想

VS の主観だけではなく他のセラピストの意見を聞きながら評価を行うことが望ましいと感じた。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 9 世話人氏名： 中村義博

GW 司会者：宮地詩織 記録者： 寺中香奈子 発表者：高木孝一

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 成長度合い
2. 意欲や態度
3. 社会性

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・成長度合い、伸びしろ（改善出来た点があったか）
- ・実習の対する意欲や取り組む態度
- ・あいさつ等のコミュニケーション、社会性

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

・基本的な態度、実習に対する意欲、自分が望む、やらされ感を持たないでほしい、患者さんに必要な評価は調べておくこと、基本的な知識、取り組み方、コミュニケーション、関わり方、知識はもちろん本当に作業療法士になりたいのか、目標をもってほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

・緊張、体調管理うまくいかず→学校に帰した。・週末まとめて評価、レポートなし、忘れていた→いちからやり直した。・患者さん誤嚥させた、報告なし→実習中止。・初めての一人暮らし、体調不良で来れない→実習中止。・メモが取れない→見学のみ。・身だしなみ、髪むすべない→指導で改善。

感想

- ・いろんな学生がいるので臨機応変の対応が必要、こういう場で情報共有することが大切。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 10 世話人氏名： 内田智子

GW 司会者： 山本愛美 記録者： 笹原佳美 発表者： 遠藤信子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. プラス面
2. 学ぶ姿勢
3. 自己評価、他者評価

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・できない所ではなく出来る所に目を向ける。
- ・知識の十分さではなく積極性に重きをおく。
- ・素直な反応や学ぶ姿勢（頑張っている感じが伝わる）
- ・社会人としての対応（挨拶ができる、休まない、返事ができるなど）
- ・学生と一緒に立てた目標がどのくらい達成できたかを大切にする。
- ・自己評価の高い場合、中間評価にて他者評価も交えしっかりフィードバックして修正を加える。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

・基本的な評価は知っていてほしい。・身だしなみ（社会人としての最低限のマナー）・基本的な疾患の知識は備えていてほしい。・ヘルプのサインを伝える手段を備えてほしい。・勉強したいこと（興味がある疾患など）・自己管理ができるように（リフレッシュできるものを見つけておく）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・やる気を感じない実習生がきたため、養成校に連絡をして対応した。
- ・知識がありすぎて自己中心的な態度だった。養成校へ連絡して対応した。

感想

事前、中間での養成校と施設との連絡が必要だと感じました。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 11 世話人氏名： 荒木 一博

GW 司会者：橋本 誠 記録者：松本理恵 発表者：鶴添大輔

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 課題を共有
2. 主体的な取り組み
3. 基本的態度（OT としての姿勢）

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・課題を共有し、その課題に対して改善できたか、主体的に取り組んだかを評価。
- ・知識・技術よりも、作業療法士としてどうなりたいかに重きを置く。
- ・実習を通してみてきた課題に対しての取り組みや、意欲。
- ・職員として一緒に働けるかどうか。人間性も含めて評価に重きを置く。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・知識面として、予め疾患の情報を伝えてあるため評価の予習、基礎的な知識
- ・学生自身が学習したい内容など考えていて欲しい
- ・精神科は人を見る、感情推測がしやすいような本を読む機会をもつ
- ・体調面をしっかりと整える、安全な移動手段を整える
- ・MTDLP をできるだけ理解してほしい
- ・社会性を身に付けていて欲しい
- ・メンタルタフネス

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・患者、スタッフ問わず距離が近い→パーソナルスペースについて自己学習を促した
- ・公共交通機関での通院が基本の実習地に車で来院、近くのショッピングセンターの駐車場に駐車→最寄の有料駐車場に移動
- ・電子ロックの職員通用口で、職員の後に続いて無断で出入り、他部署から連絡あり→正面玄関以外からの出入りを禁止
- ・OT に興味がなく車椅子を作りたい学生→学校と相談の上とりあえず実習は最後まで実施
- ・社会人を経験した実習生、若いスタッフからの指導などに拒絶反応→都度説明を繰り返し対応
- ・メンタル的に体調を崩しやすい実習生→とりあえず毎日出席できるよう配慮

感想

OT としての姿勢や主体的な取り組み、意欲などを学生評価に重きを置いていることが共通認識であった。

報告書：演習4 臨床実習における学生評価

グループ 12 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：谷本晃一

記録者：山井亨

発表者：落合美穂

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学校との連携
2. チーム連携
3. 学生への対応

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

他のスタッフにも学生の評価用紙を配布し、記入してもらう。平均をだして、評価している。間で話あったこともある。違った一面を見る事ができる。見学だけと長く関わるスタッフと評価が違うこともある。CCSなどの研修会に参加したスタッフとしてないスタッフでは、評価内容が違う印象がある。興味を持っている部分、やる気があるところ基本的な態度（挨拶・遅刻・課題など）社会人的対応を重視する。学生の能力差はある。実習中の変化・伸びしろを評価するのがいいのでは？休んで連絡をしない場合は問題か？親が電話をしてくれる。自己管理ができてない。繰り返しての理解できない場合は、学校の先生と連絡をしたこともあった。患者のリスク管理について、できていない場合。最低のルールは決めたほうがいい。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面：身だしなみと、清潔感、接遇面について。健康管理、体調管理長丁場の実習期間を乗り切るためにも。ラフすぎる会話をされる方も居て言葉遣いについて意識を持って欲しい。**知識面**：疾患についての概要は復習してきて欲しい。ある程度のさわりの知識を持っていて欲しい。**技術面**：ROM,MMT など基本的評価法を習得して欲しい一から教えるのではなく少し応用ができるように。※それでもあまり要求し過ぎず、臨床場面で学習して欲しい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

学生がホームシックで実習に来なくなったため、学校に連絡。結果的には実習中止となった。

実習中に寝ていた学生がいた。バイザーが笑顔で対応した

貧血で倒れた学生がいた為、Nsに報告し別室で対応してもらい学校にも連絡をした

感想

何かあった場合は、すぐに学校に連絡をする。
指導者が一人で抱え込まず、他のスタッフにも協力を依頼する。
学生のストレンクス（強み）を見つける視点持つことが大切。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 13 世話人氏名：中村和也

GW 司会者：生田 恵 記録者：渡邊正之， 壺岐尾優太 発表者：高木 魁

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 具体性
2. OT になりたいという気持ち
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・自分だけの意見にならないように他のスタッフにも聴取
- ・接遇について他部署，他職種から聴取
- ・プラスの面を探す
- ・良いところも，改善点も出来るだけ具体的に伝える
- ・知識面より，主体性，頑張り度，やる気など
- ・中間評価を用いて評価している

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・OT になりたいという心構え
- ・実習施設の特徴
- ・自分の中での目標

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・黙ってバイクで出勤し，学校へ連絡
- ・睡眠時間確保のため，提出物の簡素化
- ・親からのクレームについて学校へ報告

感想

・学生を評価することについては，知識より態度，頑張りなどをメンバー全員が優先しているとのこと

演習 5

多職種連携

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 1 世話人氏名：井戸佳子

GW 司会者：宮崎 豊 記録者：富田 将 発表者：国光まどか

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 見学
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスと一緒に参加してもらおう（朝礼や申し送り、アフターミーティング、利用者会議、退院前カンファなどの色々な話し合いに参加してもらおう）
- ・各職種の良い所を伝える
- ・多職種の見学をしてもらおう（多職種の役割が理解できるように伝える）
- ・患者の1日の流れを見てもらおう
- ・実際の病棟での多職種とのやり取りに参加してもらおう（学生に患者の元の生活を理解してもらった中で今の入院中の生活との乖離を感じてもらい、その乖離をどう改善していくのかという話し合いを見てもらおう）

感想

各施設様々なカンファレンスに学生を参加してもらっていることがわかった。また、セラピスト目線だけでなく多職種目線になるように多職種の見学や患者の1日を見てもらう事も大事だと感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 2 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：吉田将人 記録者：岩永雅美 発表者：吉田将人

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスの参加
2. 業務独占と名称独占
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

カンファレンス・回診・ミーティング等に参加、他職種とのやり取りと一緒に参加。

直接、現場を見学してもらいその後に各職種の役割・業務管理内容を説明する。

リハ職内でのカンファレンスに参加。

他職種からも話してもらう。

OTとして他職種に何を求めているか。

NSでは処置場面（点滴、洗浄）も見学し、OTができる範囲を知ってもらう。

福祉職の動きを知ってもらうために生活空間に入り、他職種との対話場面も見ってもらう。

退院前の合同カンファレンス（福祉用具の業者、ケアマネ）、に参加してもらい地域での生活をイメージしてもらう。

協同するうえでも業務独占と名称独占に分けて行うことを説明する。

感想

カンファレンスやミーティングへの参加を通して場の雰囲気や、実施している目的・目標を伝えることで学生への理解が深まっていくのではないかと思う。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 3 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 朝里良太 記録者： 山口泉美 発表者：大久保早紀

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 普段の連携
3. 目標設定

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・ PSW の方に今後グループか在宅が良いか伝えてもらう。
- ・ 実習が始まったときにどのようなスタッフがいるか、どのような役割があるか伝える。
- ・ 病棟カンファ、ケアカンファを他職種が集まり週3～4回実施する。
- ・ 自宅復帰など決まった時に家屋調査に同行し、家屋改修の場面を一緒にみてもらう。
- ・ ケアマネとサービスの検討、
- ・ 年間での目標を他職種で集まって会議する際に参加してもらう。
- ・ 退院前にヘルパーや家族の方に集まってもらって SW 中心でケアプランを検討。
- ・ 医師の役割を理解してもらう。

感想

病院内だけでなく、病院外の退院後に関わるスタッフや家族との情報共有が大事になってくる。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 4 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW 司会者： 福井 翔一 記録者： 合原 尚子 発表者： 松尾 明晃

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実際場面
2. 空気を読む力
3. 医師・看護師との関わり

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・看護師にアポを取って情報収集している。
- ・以前はアポを取っていたが、今は自分が看護師に聞いている場面を実際に見せている。
- ・機会が合えば症例以外のも見せるようにしている。
- ・日常の業務での他職種との関わりを見てもらおうようにしている。
- ・PTやSTは見学行ってきてと言いやすがNsは忙しかったりして調整が難しい。
- ・家屋調査に行く時は他の職種と関われるので対象者の許可があれば連れて行っている。
- ・装具など作る時に業者との関わりを見せるようにしている。
- ・医師との話を聞く時間を作るのは難しい。
- ・医師によっては学生がいると丁寧に説明してくれるのでよく協力してもらっていた。
- ・PSWや看護はお互いの実習生に対して関わり合っているので特に情報収集に支障が生じることはない。
- ・家族との関わりが多いので日常の中で関わりを見せることができている。
- ・関わりにくいスタッフに対しての関わり方は傾聴しながらも言いたいことは伝えるようにしているのを見せる。
- ・関わりにくいスタッフに対してはその人の状況を観察して介入することを見せる。（空気を読む力）

感想

スタッフの一員として実際場面で必要な関わりを見せていくことで関わりの場面をできるだけ多く持てるようにすることが重要であると思う。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 5 世話人氏名： 福島 浩満

GW 司会者：吉岡泰雅 記録者：山口勝史 発表者：桑原太志

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 説明
2. 体験
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・対象者と関わる職種（Dr.、Ns.など）がどういう関わりをしているかの説明や、その職種に話をしてもらう。
- ・現場を見てもらう。
- ・毎日の細かい報告や情報交換を、具体的に説明を行って実践する。
- ・試験外泊など、多職種との調整を説明したうえで見学してもらおう。
- ・カンファなどの会議に指導者と一緒に参加してもらおう。
- ・患者さんの入院から退院までの流れの援助に参加してもらおう。
- ・ICFシートを一緒に作成してもらおう。
- ・見学前にリハビリだけでは、ADLは向上させることができないことを説明したうえで見学してもらおう。
- ・なぜ連携が必要なのか（血圧の確認、夜のADL状況）を説明したうえで体験してもらおう。
- ・連携をする上で重要なのは □横のつながり □情報・知識・技術などの共有 と考える。
- ・説明をする上で、どういう反応が起こったかなど結果を示すことでより理解が深くなる。

感想

見学をしてもらう前の説明する重要性を再認識することができた。連携をしていくうえでその結果を示していくことで理解が深まることを知ることができてよかった。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 6 世話人氏名： 牧山美穂

GW 司会者： 松尾美弥 記録者： 宮崎優美子 発表者： 立石 尚

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生を各カンファレンスへ積極的な参加を行う
2. さらにカンファレンス内容の十分な説明と理解
3. セラピスト自身が各職種への理解を深めておく

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスに参加させる
 - ・病棟の朝のミーティングへの参加
 - ・食事介助等への参加
 - ・多職種間の目標確認の場への参加
 - ・家族指導の場への参加
 - ・患者の方向性を話し合う場（多職種が集まる場）への参加
 - ・毎日の病棟カンファレンスへの見学・参加
 - ・家屋状況の場に参加
- ↑これらカンファ等参加後は見学だけで終わらせずしっかり説明を行うこと
- ・コール対応はすべての職種で対応していく姿を学生にみせている
 - ・身体面に関してはPTからなど専門性に応じて話をしてもらう
 - ・入院時、それぞれの職種の役割説明
 - ・実習開始時それぞれの専門職種の責任者に役割の説明を行ってもらう
 - ・看護学生に対して「OTとは…」の説明し理解を深めてもらう

感想

多職種の役割をまずはセラピストがしっかりと理解し学生へ伝えていくことの重要性を再認識することが出来ました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 7 世話人氏名： 早野和之

GW 司会者：中嶋康貴 記録者：平田彩夏 発表者：内野保則

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 実際場面見学
2. 多職種見学
3. オフタイム

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

カンファレンス：実際の間を見てもらう

他職種見学：看護業務など多職種の様子を見てもらう

リハビリ場面：看護師の目につくように病棟内を歩く

情報収集：職種、情報提供者の特徴にあわせて段階付けをおこなっている

アポイントを取って話を聞く場面を作る

オフタイム：コミュニケーション

福利厚生（クラブ活動）：職場以外での交流場面に参加希望があれば参加してもらう

感想

説明だけでなく実際の間を見てもらうことで、連携している様子が理解してもらいやすくなると思いました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 8 世話人氏名：荒木一博

GW 司会者：椋木健太郎 記録者：北村恵一 発表者：平田修己

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 情報収集
3. 事前共有

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスへ参加前に OT として伝えることを学生と共有する。
- ・家屋調査時に CM 等の在宅支援スタッフともカンファレンスを行う。
- ・退院予定前の施設訪問に同行し、Ns、CW と方向性を共有。
→より院内での方向性を多職種連携し効率化できる。
- ・他職種の専門性を考えさせることを促していく。
- ・家族への情報収集の際に学生にも同席してもらう。
- ・他職種の訓練場面へ参加し、自身で情報収集するよう促す。
- ・ケア会議、サービス担当者会議へ参加し在宅でのサービス調整のカンファレンスを行う。
- ・業務外での他職種悪口を言わず、重要性を伝えていく。

カンファレンス参加前に事前に学生に方向性を伝え、連携場面を見学して頂く。

感想

病院内ではカンファレンスが必要に応じて開催されているため、ただ漠然と参加させるのではなく、方向性を事前に確認して参加することでより連携が理解出来てくるか。他施設でどのように学生に連携を指導していくか勉強になった。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 9 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者： 松尾麻友

記録者： 佐藤公紀

発表者： 高木孝一

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 日常業務の中での連携
3. 情報収集

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

場面：

- ・朝の申し送りへの参加
- ・各種カンファレンスへの参加、週1回他職種への情報提供機会への参加
- ・退院先検討場面への参加
- ・回診への参加
- ・活動前後の他職種とのミーティングへ参加してもらう
- ・訓練前後の申し送り・情報共有（変化の確認）、医師への電話連絡場面を見てもらう
- ・バルーン等の必要性確認
- ・リハ開始前にPOSでゴール設定と取り組みの共有を行う場面に参加
- ・他職種へ実際場面を見てもらって、できる能力を病棟生活に汎化していく。

方法：

- ・カンファレンス等の場面だけでなく、日常の申し送りや電話連絡、病棟での動作練習などを見せて、その意味や何を意識して行っているかを伝達する。
- ・情報収集は、事前に聞きたい内容をまとめておいて、学生自身で聴取してもらう

感想

連携場面を見学するだけでなく、その都度の思考過程のフィードバックが必要と感じた。場面だけでなく、いろんな方法があることを改めて気づけた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 10 世話人氏名： 末武達雄

GW 司会者： 峯 信一郎 記録者： 小森祐介 発表者： 笹原佳美

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスに参加
2. デモンストレーションを見せる
3. 家屋調査に同行

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・ Dr とのカンファレンス、また多職種との担当者会議を行う。その会議に参加をしてもらい多職種の仕事の理解を促す。
- ・ OT に直接同行してもらう。
- ・ 事業所によっては連携が見えやすい環境にある。
- ・ 移乗、排泄動作などのデモンストレーションを行い、多職種連携を深める。
- ・ 学生が悩んでいる内容が多職種が関連しているものであれば、学生に同行して多職種に話を聞きに行く。
- ・ 家屋調査への同行することで、在宅に関わる多職種連携を把握することができる。
- ・ 精神科では多職種で関わるプログラムがあるので、一緒にプログラムに入って見学してもらう。

感想

チーム医療は教科書だけではイメージが難しいと思うので、臨床実習で実際に指導者と一緒に見学することで感じてもらうことが大切だと思う。

多職種の仕事内容を把握することも非常に大事だと思った。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 11 世話人氏名：村木 敏子

GW 司会者：鶴添大輔

記録者：橋本 誠

発表者：三宅 陽平

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 成功事例を伝達
2. カンファレンス参加
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファに参加してもらい多職種と共同で支援している場面に同席してもらう
- ・専門職の役割について多職種から話してもらう機会を設ける
- ・退院前訪問や退院前カンファに参加してもらう
- ・ケア会議などに同伴してもらい OT の職域について理解してもらう
- ・学生に連携場面に見学・参加してもらい自発的な意見を聴取できる範囲でもよいのでは
- ・入院中だけではなく入院前後の生活期を含めた OT としての関わり方を共感できれば

伝達する方法

連携に関わる本などを読んでもらう

見学前の情報収集段階で成功例などの事例を話してあげる

感想

入院中の患者様の一部だけをみるのではなく、生活全般における OT としての関わりを理解してもらう視点を養ってもらう。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 12 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者：落合美穂 記録者： 谷本晃一 発表者：山下 剛

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 情報共有、情報交換、連携。
2. カンファレンスなどの同席。
3. 学生へのフィードバック

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方

- ・カンファに参加する。(OT 場面で患者様の情報などをカンファで学生に伝える。)
- ・認知症カフェ前の軒下カンファなどへの参加。
- ・他職種の見学や他職種から患者様の情報を聞いてもらう。
- ・他の職種の説明や見学に入ってもらい学生に接点をもってもらう。
(仕事場面への同席、家屋調査、退院後訪問など) 助手的な役割を担ってもらう。
- ・リハや看護の役割を説明し見学に入ってもらう。
- ・患者教室で職種が講和する場面に学生が参加し知識をえる。その後フィードバックしていく。
- ・他の職種への伝達事項場面をみせる。
- ・連携場面をしっかりと学生へ説明をする。
- ・訪リハでの意見交換に参加する。

感想

学生に他職種連携の場面に参加してもらい、ゴール設定／情報共有の大切さを説明し、しっかりとフィードバックする。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 13 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：高木 魁 記録者：生田 恵，渡辺正之 発表者：前田直美

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. マネジメント
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンス
- ・ケア会議，家屋調査
- ・病棟の申し送り
- ・指導者の他職種とのコミュニケーション場面，を見てもらう
- ・話し合う雰囲気を見てもらう
- ・サマリーなどの見学
- ・マネジメントしている場面を見てもらい，その後意図などを伝える
- ・情報提供時の書面（MTDLP）作成

感想

- ・いろいろな場面（分野）を見学する際に見学してもらうことの意味が多く上がった。
- ・他職種の特性（立場，パワーバランス）なども詳しく伝えるようにしている。
- ・場の空気を読みタイミングを図り話に行くことも大事。
- ・他職種の仕事なども具体的に伝える方が多い。

演習 6-1

MTDLP によるマネジメント過程の 実践

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 1 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：宮崎 豊 記録者：富田 将 発表者：国光まどか

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 目標志向型のプロセス
2. SV の技術、技量
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

- ・視点が拡がりやすい（機能面だけでなく生活面まで目が向けやすい）
 - ・ツールを使うことで予後を含めた退院へのプロセスが理解しやすい
 - ・機能面に留まらず参加レベルを考えるきっかけになる
 - ・個人に合わせた治療を提供しやすい
 - ・目標を一緒に同意することでお互いのモチベーションに繋がる
 - ・考えている内容を可視化出来る
 - ・学生の理解度が把握しやすい（学生、SV 共に）
- （課題）
- ・技術が必要（MTDIP を SV が使用出来る上で学生をサポートする能力）
 - ・作成するのに時間がかかる
 - ・機能評価が疎かになる
 - ・精神科では目標設定などを引き出すのが難しい場合がある
 - ・小児の分野では対象者の聞き取りが難しい

<話し合いの中で出た疑問点や気になること>

精神科・小児科対象の物が今後作成予定なのか？

感想

目標志向型の視点を養えるため、今後大いに活用していく必要があるが SV の技量もとても必要だと感じた。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 2 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：濱根 九十九 記録者：山崎 和子 発表者：濱根 九十九

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 理解・指導の明確化
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

シートに沿って学生が事前に準備をしやすかった
指導者側も指導をしやすい、自分の考えを伝えやすい
学生がすることがわかりやすい
多職種連携もできるのでは

課題

養成校で学んできたプログラム、治療を活用することが難しい
本人、家族から情報収集ができない場合はどうするか

感想

シート、表になっているので、指導者側も学生側も整理をしやすく、実習指導として活用できるのではないかと思った。多職種連携としても活用しやすそう。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 3 世話人氏名： 村木敏子

GW 司会者： 山口泉美 記録者： 大久保早希 発表者： 中村雄太

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 目標・目的の明確化
2. 対象者を選ぶ
3. 分野ごとの使い方

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット：考えがまとめやすく、実習生にも行いやすい・わかりやすい・考えやすい

目標が明確になりやすく共有しやすい

学生が対象者とコミュニケーションをとりやすくなる

ルーチン化しにくく、目的が明確なりハができる

課題：時間がかかる（全部行ったから）

対象者によっては使いにくい

子どもと親と OT が求めている部分が違ったり、授業の進み具合で困りが変わっていく

知的に障害がある場合、目標が出すことが難しい（周囲の関わる大人や施設職員のニーズになっていく）

精神科だと実現不可能な目標をあげてしまう方もいる（病識の有無など）

疑問点や気になること：目標共有が難しいときはどうしたらいいか

診療点数がとれるようになってほしい

小児と精神での使い方が難しい

感想

実習生にとっては考えやすくわかりやすいが、小児・精神分野での使いにくさがある。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 4 世話人氏名： 福島浩満

GW 司会者：松本順子 記録者： 福井翔一 発表者： 金澤正樹

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 気づきやすい
2. 時間
3. 教えやすい

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

・メリット

一連の流れを学生に教えやすく、説明しやすい。やることが明確になりイメージしやすい。情報収集しやすい。

情報共有しやすい(ケースバイザーの指導方法をスーパーバイザーがわかる)。

指導者が頭の中を整理しやすい。活動と参加の分類が行いやすい。

見落とししている部分のわかりやすい。気づくことが多い。

学校に戻った時に発表しやすい。

・課題となりそうなこと

指導者の理解不足がある。時間がかかる。

精神科では同意を得にくいいため正のフィードバックが行いにくい。

急性期では担当している間に付けることが難しそう。

・疑問点や気になること

普段の臨床でつかっているのか。

寝たきりの人や認知症が強い人はどうするのか。家族に聞くのか。

感想

取り入れていく必要があると思った。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 5 世話人氏名： 牧山 美穂

GW司会者：中村 ひかる 記録者：峰脇 優 発表者：山口 勝史

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLPの活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者様主体の目標設定明確化
2. 実習指導としての指導ツール・評価
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLPを臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

- ・生活行為目標に向けての流れが分かりやすい 目標を整理しやすい
- ・頭の中にある思考過程を文章として学生に見せやすい
- ・課題・目標設定が先を見越したものにできる 紙面上で確認がしやすい
- ・プログラムなど詳しく考えるので学生が分かりやすい
- ・患者様が主体となった目標を立案できる
- ・指導者による指導の差がなくなる 学生評価に一定の基準ができて主観的な評価が少しでも緩和される

課題

- ・急性期では問題点のみの検出になる 部署によってはシートが埋められない 使いにくい
- ・自分の仕事で使用理解していないので指導できない 教えながら実施すると膨大な時間がかかる
- ・継続して使うツールなので途中から使用すると繋がりが難しい
- ・家族聴取欄などの聞き取りが困難な場合がある
- ・目標をはじめに聴取すると、患者側からは戸惑う声がある

感想

- ・トップダウン方式の介入なので、実際の臨床場面での流れがより学生に伝わりやすいと感じた。
- ・部署や患者様によっては使えないなど、選定も必要だと感じた。
- ・学生指導に生かすためにも、自分達がより理解することが大切だと感じた。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 6 世話人氏名： 早野和之

GW 司会者：竹内康一 記録者：立石 尚 発表者：松尾美弥

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 流れや思考過程の可視化
2. 分析のしやすさ、部分使用
3. 使用方法

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット：課題整理がしやすい、分析の部分が使いやすい

学校で習っている、バイザー会議で事前に話しているのでなれている

部分ごとで使える、流れとしてわかりやすい

レポートの代わりに活用

臨床での思考過程も可視化しやすい、伝えやすい

その人にあった目標を立てやすい、将来のことは見通しやすい

仲間として一緒にやっていくことでより深められる

無意識でしていることを言語化できる

課題：セラピスト側がなれる必要がある

やることが多い

対象者により活用場面が難しい、分野によっては使いづらい

家族にしか聞けないことがある

アセスメントやそれぞれのシートを埋めるのに時間がかかりそう

感想

精神科ではどう使えるか

小児分野では親の目標に偏りがちではないのか

実践するとどれぐらいの時間がかかるのか

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 7 世話人氏名： 荒木一博

GW 司会者： 山中文夫 記録者： 平松夏美 発表者： 平田彩夏

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 整理しやすく理解しやすい
2. 目標設定、プログラム立案が行いやすい
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

「メリット」

表で整理するため一連の流れをまとめやすいので学生も理解しやすい

可視化、落とし込みやすい

作業療法士としての目標を立てやすい

漠然とした目標を具体的な目標に落とし込みやすい

プログラムの優先順位をたてやすい

本人の興味関心を引き出すツールとなる

OT だけで対応できない部分があったときに多職種との連携が図れる

シートに沿った話を行うことで退院後のイメージをもつきっかけとなる

「課題」

精神科など分野によって使いにくい、超急性期は不向き、使うタイミングを考える

全てを使用するとなると時間と労力を要す

まず指導者が理解していないことには出来ない

感想

まずは患者さまとの話から聞き取れた内容を書き込んでみる、使用できる箇所から使用していく。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 8 世話人氏名：中村和也

GW 司会者：中角志保美 記録者：山口健太、徳永瑛子 発表者：平田修己

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 全体像の可視化
2. 多職種連携
3. 習熟度

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・指導者とともに治療者の一員として学生が参加できる。（モチベーションが上がる。）
- ・目標が明確になりその後の生活の広がり理解しやすい。
- ・学生にとっても意見が出しやすいのではないか。
- ・具体的な介入により、多職種や対象者のまわりの支援が視覚化でき理解しやすい。

課題

- ・進行性の疾患の方では難しいのではないか
- ・指導者側の聞き取りにもスキルが必要
- ・精神科では難しいのではないか（退院が見えない方への介入）
- ・入院から在宅へのタイミングが難しい。
- ・指導者側の経験が少ない（思考過程は理解しているが、書面上に落とすことがない。）
- ・社会資源が少ない。
- ・シートの記入に時間がかかる。（学生の負担）

感想

MTDLP を用いることで指導者や学生の思考過程の整理や理解、共有することが可能になると思いました。しかし、課題として指導者側の習熟度もあることがある。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 9 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：寺中香奈子

記録者：嵩下将輝

発表者：宮地詩織

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解促進
2. 理解の共有
3. 指導者の力量

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・学生のレポートが無くなった為、学生がどのぐらい理解できているか一緒に記入することで指導者側が理解できる。また学校に戻って学生が報告のする際に役立つ。
- ・治療のプロセスを学生が理解できる。
- ・現状だけでなく未来までを考える機会になる。
- ・一緒に取り組むことで対象者をまとめる作業での負担の軽減。

課題

- ・指導者のスキルが問われる。(経験の少なさ)
- ・指導に時間がかかる。

疑問点や気になる点

- ・指導者側のスキル
- ・使用するタイミング

感想

実践していることが少ないことや、時間がかかることが導入への壁になっていたが、部分活用などができたりと有用性があることが分かった為、実習への導入がし易くなった。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 10 世話人氏名： 村木敏子

GW 司会者： 深堀敏之 記録者： 笹原佳美 発表者： 山本愛美

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 活動参加レベル
2. 可視化
3. OTRの熟練度

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

<メリット>

- ・身体機能のみでなく、活動や参加など応用プログラムも考えることができる。
- ・OTRの思考過程を可視化できて説明もしやすいし、理解してもらいやすい。
- ・取り巻く社会や地域の情報を知ることができたり、その中での問題点も捉えやすい。
- ・興味チェックリストがあることで目標が目前のことだけでなく、広げることができる。

<課題>

- ・OTRの方が実践経験がなく、活用できていない。
- ・関係性がとれた中での面接質問となると、MTDLPを行い時期などが難しい。OTRがフォローを行いながらではあるが、フォローの仕方が難しい。
- ・各時期（急性期、回復期、維持期など）でそれぞれ目標を立てる方がいいが、急性期での活用は難しいのでは。申し送り表の利用はできるのか？

感想

活用できていない現状が課題として大きく、今後、学生と一緒に作成していく機会を増やし、OTRの熟練度も向上させていく必要があると感じた。
メリットを大きく活用して進めていきたいと思う。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 11 世話人氏名：田中 剛

GW司会者：橋本 誠 記録者：山下将毅 発表者：松尾理恵

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 可視化
2. 習熟度
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

【メリット】

- ・OTR の思考の流れを見ることができ、より臨床的な考え方を経験してもらえる
- ・レポートより視覚的にもまとめやすく、指導者の手間も省ける
- ・患者さんをしっかりと見ることができるので、患者さんにもメリットになる
- ・入力する項目があるので考えるきっかけになりやすい（他職種の間わりや個人因子など）
- ・OTR の考え方が可視化できて、学生の理解度も高くなる。

【課題】

- ・精神科では合意目標を立てることが困難、評価の過程に使用するなど指導者側が工夫する必要あり
- ・指導者側の習熟度が高くないとスムーズに使用するのは難しい
- ・対象者によって利用のし易さに差がある

感想

- ・実際に臨床現場で申し送り表を使用することはあるのか？
- ・申し送り表がケアプランと似ているが、事業所などは混乱しないのか？

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 12 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：武田芳子

記録者：馬津川龍太

発表者：田中翔大

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生に親切。見えやすい。
2. スムーズな引継ぎ
3. 臨床での習熟必要

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

（メリット）・学生に対して親切。このツールを使えることにより、即戦力になる。MTDLP を使用することで新人の採用などしやすくなる。

- ・教える側も、教わる側も見える化している事で分かりやすい。後輩育成にも繋がる。
- ・社会適応プログラムなども入っているので、家族への協力など考えやすい。
- ・他職種協働にも応用。申し送り表など使いながらスムーズな引継ぎが出来る。
- ・在宅で使用していくにも引き継いだ情報を元に在宅スタッフで詳細な情報の元に肉付けしていくなど。

（課題）・基礎研修は受けたが、臨床で活用できていない。

- ・使用回数が少ないので教えるまでが出来ない。
- ・時間がかかる。慣れてくれば早くなると思うが・・・できるところを使っていく。
- ・同意書 MTDLP を使用していく際、事例報告の際は同意書があるが、普通に使用する際は取っていくべきか？

感想

まずは使っていき事で、学生と同じ視点で使用していけるのではないかと感じられました。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ13 世話人氏名：井戸佳子

GW司会者：平松直也 記録者：川原 梓，渡邊正之 発表者：壺岐尾優太

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 指導者の知識不足
2. 合意目標を忘れたら
3. 精神科での使用

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

- ・考えている事を文章に起こすことで頭の中を整理することも出来る（見える化）
- ・申し送りや、まとめなど部分的にしようすることは導入しやすい
- ・指導者、学生、患者様それぞれが情報を共有することが出来る
- ・ICF の内容や予後予測などが考えやすい
- ・「活動」と「参加」に目が向きやすい
- ・見るポイントとして絞りやすくなる

<課題となりそうなこと>

- ・MTDLP の勉強不足が指導者にとって不安
- ・カルテ、サマリー以外に業務が増え、二度手間になるのではないか。
- ・身体障害分野以外では、シート内でドロップリストに当てはまらないことが多い

<疑問点や気になること>

認知症の型の合意目標に対する忘れ・不満への対応

感想

- ・部分活用は行ったことがある方が多いも、指導者の知識不足に対する不安が強いと感じている
- ・分野や領域による使い勝手についての話が多かった

演習 6-2

事例報告書の作成

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ1 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：宮崎 豊 記録者：富田 将 発表者：国光まどか

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. ニード、デマンド
2. 言語化
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・ニード、デマンド（ニードに対しての目標設定）
- ・病前の生活や家族、環境面などの情報
- ・地域資源
- ・表
- ・生活行為向上マネジメントシートと考察

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・思考過程の「見学、模倣」で言語化してもらう
- ・予め把握してもらいたい内容のチェックリストを作成する

感想

・話し合いを何度も重ねていく内に MTDLP が思考過程などを理解する上でとても良い物だと再認識した。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 2 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者：坪田優一 記録者： 本田史明 発表者：坪田優一

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 計画性
2. コミュニケーション
3. ツール

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・発表時間を決める
- ・「初めに」の内容を分かりやすく
(何を報告したいのか、それに必要な内容を書く)
- ・本人（対象者）がしたいこと、それに向かったの必要な内容
- ・ツールの利用（書式を作る）

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・ICFの記入（相互作用がみえやすい）
- ・コミュニケーション
- ・自分で自分の計画を立てる（スケジューリング、評価内容等）＝自発性につながる
- ・感想を書かせる（学生の思考過程がみえる）

感想

学生の思考過程を読み取ることが重要で、それを表出させることが指導者側に問われている課題だと感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 3 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 大久保早希 記録者： 中村雄太 発表者： 松野有花

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 問題点
2. 学生の特徴
3. 行動と説明

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDLPを使用した上での目標や生活歴等に重きを置いた内容を記載(A4じゃ収まらないかもしれないが...)
- ・図に書いてみる(繋がりを矢印で繋ぐ)→問題を本質化できる
- ・問題点がしっかり書けていれば、一般情報や医学的情報など羅列する必要はないのでは。
- ・形式にとらわれない
- ・結果→なくてもいいのではないか?(言葉で確認できれば)

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・発表、ディスカッションを行う(事前準備を一緒に行った上で)
- ・繰り返し、積み重ねること(学生への見学→模倣→実施の中で)
- ・対象者との関わり・フィードバックの中での学生自身の変化を感じとる。
- ・学生によって特徴が違うため、個別で対応を分ける。(説明からなのか行動からなのか)
- ・指導者同様な行動がとれているか。言葉だけでは不十分なこともある。(リスクをしっかり考慮した上で)
- ・言動や文章ありきの行動での評価が行えればベストではないか。

感想

学生個人で対応は異なると感じた。言葉で伝えることも大事だが、行動面での評価することの重要性を感じた。最悪A4の報告書は不要なのかもしれない。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 4 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：金澤正樹 記録者：松本順子 発表者：福井翔一

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 焦点化
2. 合意目標までの過程
3. ディスカッション、思考の言語化

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・発表を行い、思考過程の説明をしてもらう。
長期：経過、目標、達成度、今後の見通しなど。
短期：申し送りなどの報告書を使用し病名、リスク、問題点など焦点を当てているところをメインに。
- ・焦点を当てているところを主に記載し要点化する。
- ・題名のみ抜粋してもらう。
- ・テーマを挙げる。
- ・MTDLPは読みやすくまとめ易いが合意目標に至った過程を明確にする。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・ディスカッション
- ・発表の場を設け、他者にも説明できるよう思考を言語化する。
- ・1週間毎など定期的に経過報告を行い、コーチング・ティーチングを繰り返す。
- ・治療計画までは立てられるが実際の治療が出来ないことがある（思考過程の理解は出来るが実行・行動出来ない）ので、行動させてみる。

感想

思考過程を確認するには言語化してもらうと理解しやすいと思われるため、ディスカッションや定期的な報告など、コミュニケーションがやはり大切であると思います。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 5 世話人氏名： 早野 和之

GW 司会者：緒方 剛 記録者：黒田 結花 発表者：宮脇 優

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 情報の整理
2. 学生とのコミュニケーション
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・アセスメントを入れる。アセスメントの結果をICFへ落とし込む。
- ・その人がどうなってほしいか。どういう出来事があって入院しているのか。
- ・環境因子個人因子を表記し、患者の転帰先を考えてもらう
- ・学生にテーマを決めさせる（つまみ動作ができるようになる等）
- ・目標を決めて、必要なだけの評価項目を載せる
- ・その患者にとって必要な項目を取捨選択する

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・学生とのディスカッションをする。
- ・学生の気づき、変化点などを一日の終わりに毎日聞いてみる。
- ・インタビューディスカッションなど、仮想患者を想定しての問題提起
- ・その日のことをその日に聞いてみる。

感想

従来型の報告書ではなく、その患者にとって必要な情報の整理の必要性を感じた。
臨床思考過程を理解するには、学生との頻回なコミュニケーションの重要性を感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 6 世話人氏名： 荒木 一博

GW 司会者： 時山 真梨 記録者： 松尾 美弥 発表者： 竹内 康一

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 従来の形式にとらわれない
2. 事例の生活行為に着目した内容
3. 指導者と学生との対話

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

1. ICFの形に入れこんでいく ・ 順番を変える（目標を先に持ってきてよいのでは）
半分はMTDLPの様式、半分は経過と考察。
報告書として箇条書きでもよいのでは。
発表する目的が治療の報告書なのか、チームの関わりとしてのものなのか
→ 図でもよい
支援として一番力を入れたかを書いていく。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

ケースノート、デイリーノートの利用 わからないことは、自己学習。
見学した時の、学生の思考をまずは聞く
その場のフィードバック。投げかけはしている。
イラストで説明。 話す時間を増やす。
学生発表は学生の思考はわかるが、ほとんどの施設ではしなくなった。
実習指導者と学生が翌週する内容を全体に通達。
模擬カルテを書いてみる。
評価した内容は指導者が提示し、目標やプログラムを一緒に立案。

感想

指導者と学生のコミュニケーションのとりかたの重要性を痛感した。評価にとらわれず、学生と話す時間をいかに設けていくかを組織の中でも検討していく必要があると感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 7 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者：中野雅昭 記録者：内野保則 発表者：古荘広樹

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. ICF
2. トップダウン
3. 対象者の要望

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・本人の要望が書ける。環境、個人、活動、参加それを達成するために評価、計画を立てる。
- ・ICFの考え方がまとめていれば。トップダウンで記載してはどうか。
- ・目標、プログラム、全体像、経過を行っての感想
- ・対象者が大切にしていることが書ければ

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・デイリーノートに学んだことを記載。内容は感想。
- ・A4白紙に記載。対象者に対してどうなってほしいか記載する。
ディスカッションし、わからないところは一緒に確認。
- ・見学、模倣、実施の前後に内容を確認する。似たような対象者がいれば、どう思うか確認。
反応を見る
- ・答えてほしい答えを導き、細分化していく。ホワイトボード、紙に記載する。
- ・指導者が頭の中で考えていることを図にして説明。一問一答する。
- ・要望からの一問一答を繰り返す。
- ・その日その日で体験したことを振り返る。見学、模倣、実施に関して。デイリーノート活用
- ・記載内容は箇条書きにする。

感想

学生が報告書を作成する場合、対象者の要望、要望に対しての評価、計画を立てる内容を記載する必要がある。ICF、MTDLPを部分活用することで報告書を簡素化することができるかもしれないと感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 8 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：中角志保美 記録者：椋木健太郎 発表者：平田修巳

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP
2. コミュニケーション
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・ どうしてその目標にしたかの理由や考え/その目標を達成することで何が分かるのか/目標にたどり着いた過程/実行するまでの過程
- ・ 目標を決めるにあたって何を材料にしたか。
→ 本人のニーズ、生活歴、興味関心の項目、環境因子
- ・ 一般情報、問題点、目標→なぜその目標にしたかの考えは理解できそう
- ・ MTDLP+経過（経過の中で実際に取り組んだ物事に対する学生なりの捉え方）、考察

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・ コミュニケーションをしっかりと行う。
- ・ 指導者の考えを話す（ティーチング）、学生の考えを聞き出す（コーチング）をうまく使い分ける。
- ・ MTDLP を作成する過程でディスカッションをする。
- ・ 質問しやすい環境作り
- ・ 他人（他の学生や患者）に口頭説明できるようになる。
- ・ 質問を投げかけて答えられるか。

感想

- ・ MTDLP は積極的に活用すると学生に伝える上で指導しやすいと感じた。
- ・ 考えを引き出すだけでなく、まずは教えることがスムーズに指導しやすい。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 9 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：田中悟郎

記録者：宮地詩織

発表者：佐藤公紀

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. ティーチング
2. コーチング
3. アセスメント

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

・精神科は長期入院の方が多い。報告書の中に気持ちの変化がかける箇所があればいいのではないか。

・レポートの項目内容は変えずに使用しても、専門用語がなかなか使われていない。（どの様な専門用語を使っていいかわからない）

学生次第でレポートの内容を使い分けている。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

・統一された書式で確認できれば評価できるのではいか。

・（指導をしていると学生の考えではなく、バイザーの考えになってしまう。）

・評価から問題点につながる過程を議論して、思考過程を間に入れる。

・今まで評価にアセスメントをしていた為、一つ一つにアセスメントがあれば理解度が分かる。

・レポートがなく、思考過程を考える機会少ない為、聞き出す必要がある。学生に合わせてティーチングやコーチングを使い分ける必要がある。

感想

学生の思考過程を確認し理解することは難しいと感じた。レポートが無くなってきている為、コーチングやティーチングを使い分けて学生と接していく必要がある。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 10 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者： 笹原佳美 記録者： 山本愛美 発表者： 小森祐介

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. ディスカッション
2. 図式化
3. コミュニケーション

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・生活期：生活の中で何に困っているかを書く。
- ・目標を挙げるに至った過程、着目した要因を書く。
- ・考察で書くだけではなく、項目の中でアセスメントを書く。
- ・優先順位をどうやって決めたのか分かると思考過程が分かりやすい。
- ・なぜその評価を選んだのかを書く。行った評価を順番通りに書く。
- ・学生と指導者との考えを2パターン書く。
- ・将来像をとらえたものを書いていく。流れが分かるように書いていく。
- ・ボトムアップとトップダウン2つの形式を書く。
- ・できなかった評価も書く。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・ディスカッションしていく。
- ・図式化していく。
- ・その都度なぜそうしたのか確認していく。日々のコミュニケーションをとっていく。
- ・いきなり学生に思考過程を尋ねるのではなく、学生に考える時間を作る。

感想

思考過程を可視化するために何かのツールは必要だと思うが、内容については検討していかないといけないと感じた。学生の思考過程の確認方法については、指導者側も聞き方などの配慮が大切だと思う。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 11 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：松尾理恵

記録者：山下将毅

発表者：川瀬朋美

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・対象者のエピソード、生活歴、生育歴、希望、デマンドを一般情報、個人因子に入れる。
- ・目標とする動作の作業分析

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・ディスカッション
- ・文章を極力減らし図や表などを使い視覚的に簡潔に思考過程をまとめる

感想

MTDLPは素晴らしい

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 12 世話人氏名： 井戸佳子

GW司会者： 山井 亨 記録者： 落合美穂 発表者： 武田芳子

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP 演習シート
2. ディスカッション
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

(エクセルシートをコピーアンドペスト)

- ・MTDLP 演習シート・プランシートを一緒に作成して資料とする。
(症例に限られる場合あり。)
- ・従来型は合意目標がない
- ・学校→施設に対しての提案はしていない。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

(エクセルシートをコピーアンドペスト)

- ・思考過程が学生に伝わる何か ・統合解釈 ・確認のための質問の工夫
- ・プレゼンテーション
- ・ディスカッション
- ・会話
- ・似た症例の見学をさせ、意図した答えを引き出せれば。
- ・活動前にポイントを説明。→活動終了後の確認。口頭 and 紙面

感想

まとめる内容としては、MTDLP 演習シート・プランシートに重きを置きつつ、従来型での大項目も必要となってくる。理解を確認するための方法として、ディスカッションで思考過程の再確認を行うにあたってコミュニケーション能力も必要となる。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 13 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：壺岐尾優太 記録者：渡邊正之, 前田直美 発表者：平松直也

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. フローチャート
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDLPを元に作成
- ・トップダウン的な情報
- ・時系列を並べる方が見やすい

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・フローチャートなどにて焦点を絞り患者様の説明をする
- ・口頭発表

感想

- ・今までのレジユメの形を変えることに抵抗があり、指導者側もどのように指導すれば良いか混乱している
- ・症例発表の準備に関しては、指導者側として心配になることがある。

演習 7

作業療法参加型臨床実習の理解

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 1 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：川嶋沙央里

記録者：富田将

発表者：光武泰裕

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. リスク確認
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・患者と対面する前に確認する内容：患者情報とリスクの確認、事前知識の確認、患者の姿勢確認、学生の位置、判定基準、触り方、代償動作の確認
- ・セラピストの検査場面を見学してもらうときに患者の承諾を得て、説明しながら実施
- ・実施後、患者がいないところでFB、ロールプレイ

○模倣できる基準：

- ・セラピストが伝えたリスク、方法を復唱出来た時点
- ・ロールプレイを行ってリスク、方法が把握出来ているか

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・デイリーなどをまとめる時間や空いている時間を使って勉強する時間を作る
- ・午前の出来事は午前うちにFBする

感想

・どこの病院も業務内にデイリーを作成する時間を設けるように対応が変化しているのを感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 2 世話人氏名：福島浩満

GW 司会者： 檜山 力 記録者： 國分亮吾 発表者： 檜山 力

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. オンタイムでのフィードバック
2. 事前説明
3. 整理する時間をつくる

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

・見学：代償、起始停止の確認、MMT の目的、注意点、患者様の情報(痛みなど)、判定基準(ロールプレイ入れて)等を教えながら見学してもらう。 健側側を 5 と基準として患側側を考慮してもらう。

・模倣への移行基準：指導者への実演を行い指導者が判断

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

課題をあまり出さない。定時以上は残さない。実習中に調べる時間や記録等をする時間を作ってあげる。こちらが課題を出すのではなく、学生が自主的に学習をするように仕向ける。「調べとって」じゃなく「ちょっと読んどって」ぐらいの程度で声かけを行う。見学毎にフィードバック、まとめる時間を作る。

感想

書類として提出する課題に時間を要すよりも、実習中に考える時間を持ってもらい考えを確認する時間を作る事が必要だと感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 3 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 中村雄太 記録者： 松野有花 発表者： 西村和也

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 確認
2. ロールプレイ
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・教科書で一緒に確認
- ・5w1h での確認、リスクの指示（対象者の注意点）、患者様の環境を考える
- ・見学場所（立ち位置）を指定する
- ・見学してほしい所、目的を伝えておく
- ・ロールプレイの実施（セラピストと行ってみる）

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・症例数のコントロール（OT 部署内での調整）
- ・フィードバックの時間を調整
- ・課題を与えない（自主的に）→業務時間内で学習時間を作る
- ・実習指導者の人数を増やして分割する（1 学生に対して）
- ・週間スケジュール表を作成
- ・デイリーノートの調整

感想

どの場面においても常に確認をしていくことが必要になると感じた。
症例数やスタッフの調整、課題やフィードバックの時間確保など検討していくことが多いと感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 4 世話人氏名：早野 和之

GW 司会者：福副康明/金澤正樹 記録者：福井翔一/宗うらら 発表者：松尾明晃

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 声かけ・コミュニケーション
2. 簡素化
3. 単位数を少なく

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・OT だけではなく、PT にもお願いして回数をこなす。

○移行する場合

- ・声掛けの仕方やコミュニケーションがある程度取れること
- コミュニケーションが苦手な学生さんなどは先に患者さんの情報提供を行う。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・業務内で指導を済ませてしまう
- ・SV は単位数を少なくしている、他のスタッフに負担してもらう
- ・電子カルテになりログが残ってしまうため、カルテ優先し、空いた時間を指導に使う
- ・学生指導のために単位数を減らした分、実習の謝金を増やしてほしい
- ・フィードバックを簡素化する、あらかじめ指導できる時間を指定する
- ・デイリーに書いてもらい、後でフィードバック (忙しい時など)

感想

指導時間を作るために SV だけでなくスタッフの協力が不可欠だと感じる。
指導する時間が取れないのは、共通した問題点であることを再確認できた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 5 世話人氏名： 荒木一博

GW 司会者： 桑原太志 記録者：本多祐基 発表者：黒田結花

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. セラピストを通してフィードバック
2. 評価の意義が説明出来る
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

模倣レベル)

- ・複数の患者様を多く体験し、数をこなす(技能面)
- ・先生で練習をして体感、フィードバック(動かし方などポイント)を受けながら学ぶ

模倣→実施の基準

- ・リスク管理が出来るようになってから
- ・学生に質問して先生と学生双方が自信をもてるようになったら
- ・患者様の同意を得る

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・デイリーノートをその日の内に完成させる(患者様のリハ終了以降、業務内までに)
- ・午前と午後の空いた時間を利用する。
- ・スケジューリングをする(1w の流れをスケジュールするなど 新人研修みたいな流れ)
- ・具体的な時間帯を指定してフィードバックをする。
- ・学生指導者は患者数を少なくしてもらい、学生指導の時間を作っている。

感想

業務内でフィードバックなど指導を作る時間をいかに作っていくか環境づくりが大切なことだと感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 6 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：青野 香那

記録者：竹内康一

発表者：時山 真梨

学修目標

見学—模倣—実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 注意点の共有
2. 各施設での工夫の共有

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【模倣レベル：肩屈曲の MMT】

- ・見学レベルで説明を行った内容を再度しっかりと言葉で伝える
- ・注意点について伝えながら実施する（方法を見せる）
- ・実施中に注意点があればその都度指導を行う
抵抗のかけ方、力の入れ方など実施中に不足している点を実施しながら説明
- ・実施後に達成度を確認し出来ている点と改善する点について説明する

【実施へ移行する基準】

- ・事前にリスクや注意点について理解が及び、対象に対しても説明ができる
- ・力の強さ、事前の確認など実施に問題がない

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>（1 日の流れ）

- ・訓練時間と別枠で指導時間をつくる（決まった時間に学生を記録の時間に回す）
- ・実施のあとの時間にその場その場でフィードバックを行う（業務内に時間を作る）
- ・指導者側も余裕を持ったスケジューリング（担当を一人減らすなどの配慮）

感想

各施設での取り組みなどの確認ができ、情報の共有など有意義な内容でした。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 7 世話人氏名： 末武 達雄

GW 司会者：内野保則 記録者：古荘広樹 発表者：中野雅昭

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. フィードバック
2. 時間外勉強会
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

肘屈曲の注意点

測定方法を事前に確認しておく。

肘の疼痛があるかもしれない

模倣する前の確認

指導方法の工夫、どれくらいできたら実施するか。

声かけ、リスクの確認、言語化がスムーズかどうか。学生も大丈夫の確認

自信があるかどうか。自信がない場合はもう 1 回おこなってから。

1 回きちんとできればよい。

出来るだけ多く経験させたい。1 事例で見学、模倣を一緒に行う必要はない。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

7 時間 1 時間は整理。4 時半に終了

無理な時はフィードバックなしの日もあってよい。

デイリーを書く時間を勤務中に行う。15 分でフィードバックを行う。

15:00~デスクワークを行う。

急性期と回復期で状況は違うけれども。

時間外に勉強会に参加する場合はどうしているのか。

感想

実習時間が 4 5 時間以内と決まっている。フィードバック時間の短縮、実習地でのデスクワーク時間の確保は必要になってくると思う。時間外の勉強会に参加できるよう、実習開始時間を遅くするなどの対応の意見が挙がり参考になった。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 8 世話人氏名：村木 敏子先生

GW 司会者：北村 恵一 記録者：山口 健太 発表者：永田 佑貴

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. リスク等、理解のチェックリスト
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

模倣の指導方法

・模倣内容及びリスクの事前確認、補足・部分的な実践指導（その時にその場で）⇒
徐々に指導を減らす・学生の達成度を聞く・よかった点を伝える・改善点を伝える

模倣から実施へ移行する時は

- ・リスク管理ができているか
 - ・学生が説明しながら模倣できるか
 - ・手技や肢位によって代償動作がでないかを理解できているか
 - ・指導者で抵抗のかけかたを試行する
 - ・患者様に対する声掛け、説明ができるか
- 上記をまとめたチェックリストが学生、指導者にあれば

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

・日誌やレポートを書ける環境を作る・職場で指導分の時間を作れるようにする・スタッフ間で協力して指導の時間が作れるようにする・予定を伝え、後は学生の自主性に委ねる・学生の自宅での時間管理を知る・道具を病院管理にする

感想

見学、模倣、実施やコーチング、ティーチングなどを複合的に考える必要があると感じ、勉強になりました。また、早く帰さないといけないことから正確に指導ができたか不安に感じます

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 9 世話人氏名： 田中 剛

GW 司会者： 松尾麻友 記録者： 田中悟郎 発表者： 高木孝一

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. リスクの把握
2. スケジュール管理
3. フィードバックを必ず入れる

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

・まず学生がどこまでリスクを把握できているか確認する。MMT 実施する目的の確認（指導者に言える）。見学及び模倣レベルの確認。指導者だけでなく他の OTR からも実施場面を見てもらう。学生は緊張すると思うので安心できるような声掛けや距離の取り方が指導者には必要。失敗した場合、すぐフォローすることも必要。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

・ 8 : 3 0 - 9 : 0 0 : 申し送り・朝礼・今日のスケジュールの確認、9 : 0 0 - 1 2 : 0 0 : 訓練、1 2 : 0 0 - 1 3 : 0 0 : 昼休み、1 3 : 0 0 - 1 6 : 0 0 : 訓練、1 6 : 0 0 - 1 6 : 3 0 : デイリー記録、1 6 : 3 0 - 1 7 : 0 0 : 指導者と振り返り・明日のスケジュールの確認、自宅にて学習または勉強会出席 3 0 - 6 0 分。

感想

・指導者からのフィードバック時間はきちんとスケジュールに入れておいた方がいい。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 10 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者： 小森祐介 記録者： 山本愛美 発表者： 峯 信一郎

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生とのサインを決めておく
2. 学生を褒める
3. 時間設定を徹底する

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【実施レベル】

- ・実施前の手技・リスクの確認は必須。
- ・実施中に困った時のサインを決めておく。（患者に伝わらないようなサイン）
- ・実施中、異なる場合フォローをする。（無言のアシスト）
- ・良かった点の伝え方。対象者によっては対象者の前で学生を褒める。
- ・見られると緊張してしまうため、自然な形で見る。（立ち位置、雰囲気作り）

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・学生の記録をとる時間を決めておく。 ・調べたことは教科書の添付でも可。
- ・デイリーにどれくらい時間がかかるかを確認し、学生の能力に合わせて時間をとる。
- ・フィードバック時間を決める。できなかった時は次回にまわす。
- ・症例発表をやめ、日々のカルテを利用して他スタッフへ発表する。発表の準備をしない。
- ・学生の特徴や動きを予後予測して指導者も対応を考える。

感想

学生はそれぞれ性質が異なるため、学生の性質のしっかりと見極めそれに合わせた対応が大事だということが分かりました。そのためしっかりと実習時間や実習方法を工夫していく必要があると感じました。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 11 世話人氏名： 井戸佳子

GW 司会者： 小中原隆史 記録者： 鶴添大輔 発表者： 川瀬朋美

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 業務の調整
2. よく学生を観察する
3. 承認・動機付けでやる気アップ

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫> (実施レベル)

- ・ 指導前に：過去指導内容の振り返り、リスクの確認、検査姿勢の確認を行う
- ・ 患者の前で：学生主導でオリエンテーション～不足があれば指導者が補足する
- ・ 検査中に：正しい検査肢位を取ることができているか、学生がどこを見ながら実施しているか指導者がモニタリングする (表情・代償動作)、検査中に修正 (体調を考慮した中断も含む) するのか・事後フィードバックするか、患者の特性に合わせ指導者が考慮する

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・ 16 時に当日のまとめをする時間を確保し、その後 17 時までにはフィードバックしている。
- ・ 後でまとめてではなく、指導直後に都度フィードバックすることで効率化を図っている。
- ・ 学生の得意・不得意を実習開始時期に把握し、学生にあった方法で指導を進めている。
- ・ 疑問点・つまづきに早めに気づけるよう、指導者が注意して学生を観察する。
- ・ 指導者へはフィードバック時間を一日 20 分間取れるように業務調整している。
- ・ 理解が不足している点について、自己学習の動機を引き出せるような声かけを行う。
- ・ 承認の声かけでやる気を引き出す。指導者以外のスタッフも同様の視点で学生へ関わる。

感想

各事業所で忙しい臨床の中でどう学生への指導を十分に・効率的に行うのか、工夫している点を共有でき有用であった。また当班のディスカッションでは、学生のやる気を引き出せるような関わりを持つことで、自己学習での補習を学生自らが行ってくれるといいのではないかという意見も挙がった。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 1 2 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 谷本晃一 記録者： 落合美穂 発表者： 武田芳子

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 学校側からオスキーの評価表をもらう
2. 45 時間に収めるためのカリキュラムを他の職員に理解してもらう
3. フィードバックの時間を勤務に組み込む

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

実施レベル

- ・ 監督は必要？遠位監視ではだめか？ない場合、有能感・自立感を感じられる。
- ・ 3 回実施しなければいけない？
→チェックリスト+確認をして段階を判断する。
- ・ 学校側からオスキーの評価表をもらう
- ・

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・ 業務時間内の空き時間にデイリー等の作成をすすめる。
- ・ 上記の時間に収めるためのカリキュラムを他の職員に理解してもらう。
- ・ フィードバックの時間を勤務に組み込む。(1 単位)

感想

どの段階においても確認を細かく行う事が必要。実施レベルでは、普段学生が気づきにくい代償動作や表情や検査姿勢などのモニタリングを行い、なるべく可能な範囲でその場でのフィードバック・修正を行うと理解がしやすいのではないか。また、業務時間内にまとめる時間を作れることで内容を忘れる事が少なくなる。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 13 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：平松直也 記録者：渡邊正之，壺岐尾優太 発表者：生田 恵

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 正のフィードバック
2. 見守り距離
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

(実施レベル)

- ・リスクの少ないものから行う
- ・使用頻度が高いものから行う
- ・見守りの際、プレッシャーをあまりかけない
- ・褒める、出来てないことを具体的に伝える
- ・学生の意見も聞いていく

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・提出物を日中行い効率良く
- ・週休二日
- ・フィードバックの時間を日勤中に作る
- ・日勤帯に情報整理する時間を設ける
- ・AM は指導者主動，PM は学生主動と主体性を高められるようにすることで分からないことを自ら学ぶ機会が増える

感想

- ・模倣と実施の違いが曖昧であり、実施レベルでの見守りの程度、距離感が難しい・
- ・実施レベルに関しては、質や速さなどの手技に関してもスキルアップ出来ることを意識し、繰り返し行うことは大事だと感じる